
原作介入の行方！

sakiken

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作介入の行方！

【Nコード】

N5447M

【作者名】

sakiken

【あらすじ】

ナオトは気がつく我真つ黒と真つ白の空間の境界にいた。そこには神がいて、俺が次代の神候補になったことを伝えられる。次代の神になるための修行を兼ねてチート付きで異世界に飛ばされることになるのだが・・・って感じの話です。どうぞ見てってください。

更新速度は基本的に3～4日に一回ってかんじです 俺TUEE EEE小説です。

題名「世界をチートで？ぶっこわせw!？」から「原作介入の行方！」に変更しました。

第0話（前書き）

注意：この物語は、途中から原作の内容を逸脱する可能性や、当然タイトルのごとく原作ぶっ壊しに走る可能性もあります。更に、他の作者様とネタが被るということも起こりうるでしょう。そして原作の内容を覚えていない、もしくは原作の知識が不十分な場合もおそらく、というより必ずあるでしょう。その際は感想にて私にお知らせくださると幸いです。最初はF a t eの世界に行こうと思います。以上の点を踏まえて、まあ見てもいいんじゃないかね？と思ってくださった方はどうぞ先にお進みください。てか、見て、感想ヲクレbでは。（更に厨二要素含むかもねw）

第0話

第0話： プロローグ的なノリで。

こ…これは一体何だというのだ…

俺は今果てしなく続く真っ白な空間と果てしなく続く真っ黒な空間の境界に居る。当然誰もいない。居るのは俺一人。最初はこれを夢だと思い、眼が覚めるのを待ったのだが、そのような兆候は見られない。というよりもむしろその逆で、頬をつねると痛く、空腹感もある……。

俺の名前はナオト。19歳で青春まつただ中の学生さ。顔は普通を自負している。

趣味はゲームとマンガ、そしてアニメ。ポピュラーな作品は全てプレイ、もしくは視聴完了している。でも女主人公のアニメはどうも見る気が起きないんだよね…、まあ例外も存在するけど。

確か昨日はフツーに学校に行き、それじゃあお前は大学に行けないぞ、とか教師から言われたくらいで特筆するようなことはなかった。フツーに家に帰り、フツーに飯を食い、フツーに寝た。この世の中で誰もが行っている、日々を生きるということ。つまり生活。その

フツ―に生活をしていた俺…。何が起きた…。

カラーの夢を見る俺とは違って、白黒の夢を見る人たちもいるのだから、こんな痛覚や生理的欲求があるような夢だつてあるさ…。あー、早く夢さめないかなあ…。あ、そういえば、過去を顧みても出来ることは後悔しかない、なんて誰かが言っていたような気がするなあ…。とか、その時の俺はこんな風に楽観的にしかこの状況をとらえていなかったのさ。

「こんにちは！ここはどんな感じですか？」

………この、見渡す限り同じで、変な空間に少女がいた……。おいおい、親はなにやってんだよ。目を離しちゃいけませんって雑誌にかいてなかったのかよ…。？まあいい。こんな変な夢は初めてなわけだし、興味がないと言ったらウソになる。でも俺は一応帰らなきゃならないからね、と思って。でも、どっちにしたって現状把握をしなきゃいけないわけで…。

「ココは一体…どこだか分かるかな、お嬢ちゃん？」

こちらを向いて少女はにっこりと笑う。つられて俺も笑いそうになったところで俺の顔はひきつることになる。

「審判の門です。死んだときの。」

冗談には聞こえない。冗談だったとしても俺はこの変な空間の説明ができない。更にこの子の、この純粋な笑顔をみて、この子が嘘を吐いているとはみなせない。俺はそこまで性根がひん曲がっているわけでもなし。つまり、真だと思われる。

「は？俺は何で……。」

「もちろん貴方はまだ死んでいませんよ？明日死ぬことになっているです。でも貴方は霊格が高いようですから、死んだら記憶を持ったままココに来てもらって、貴方を次代の神候補にするです。フツの人は記憶を失った状態、つまり真っ白な魂の状態でココに来て、そして消滅してしまうのです。でも貴方は、一応私が呼び寄せたとはいえ意識を保ち、普通の状態でいることができています。まあ霊格が高そうかなって思って呼び出してみたんですけど……。このことから分かってもらえると幸いです。」「あ！っと、言うのを忘れていましたが、当然私は神です。」

この時、俺はあどけない神様に何も言い返せなかったし、もちろん聞き返せもしなかった。これこそが、開いた口が塞がらない、とも言っのだろうか。

……そして翌日、俺は心臓発作が原因で死んだ。

「はいこんにちは。神です。」

「……………」

眼が覚めると、俺はまた夢の時と同様の空間にいた。しかしこの前のように境界線のちょうど真ん中、ではなく、白い空間の方に完全に入っていた。

神様が待ち焦がれたよ、やっと来たね、とても言いたげな、でも死なせちゃってごめんね、とも言いたげな矛盾した表情を浮かべていた。

「おめでとうございます。貴方は死に、そして神候補として生まれ変わったです。」

「……………」

これから一体どうなることやら…あ、そういえばまた腹が減ってきたわ。さっきは飯を買いに行く途中だったもん…。おいおい肉まんだけは持ってたはずなのに。

そんな風に、とくに何も話さず、過去を顧みていた俺。

「え？あれ？記憶がない、とか、自我がない、なんてことないですよね…ハハ、まさかね…」

彼女は、俺が何も言わないことを不安に思っただけらしい。

彼女が俺に近づき、不安そうな面持ちで俺に問いかけてきたため、俺は自分の世界から引き戻された。

「大丈夫。俺は大丈夫。」

良かった、本当に良かった。貴方が死んでいたら私はまた苦勞して、何百年も神候補を探さなければいけない所でした、と彼女は笑った。

「貴方には、修行の為に異世界に飛んでもらうです。そのところは良いと思います。しかし貴方は神候補。飛ばす異世界で死んでもらっては困るのです。そこで、俗にチート、と呼ばれる反則的能力を貴方に付加します能力は後で確認してください。それではもう時間ですそろそろ行って下さい。」

徐々に視界が白で満ちていく。

「そう…か。わかった。でも君はどうなる？また一人なのか？」

俺が死ぬ前に来た時も、今もココには神様を除いて一人もいなかったから。

「そんなことないですよ！！私にはたくさん友達がいいますから！！」

ほら、こんなにイパァーイ！と身振り手振りでその友達の多さを俺に伝えようとする。しかし、分かる。空元気だ。寂しさを隠し切れていない。ずっと一人だったのだ…。だから、俺は

「大丈夫。俺は、俺たちはこんな出会いでこそあれ、もう友達だ。もう一人じゃないよ。」といった。

ひとりじゃない、それを反芻し、ありがとう、と泣き笑いをしてい
る少女をうつすらと確認したところで視界が完全に白に染まる。

そして意識は暗転する。

第0話（後書き）

小説を書いたのは高校生の時に2度程。とにかく小説が書きたくなつたので書いてみた感じです。なんか感想よろしくです。とりあえず駄目だししてくれさえすれば、その点を改善して頑張っていきたいと思います。 よろしくですb

追記：今日もしくは明日中に0・1話を改定します。ト書きになっているのがありありと見てとれるので。でもストーリーとは関係してこないのです。

追記に追記：改定しますた。読んでやってくださいー（・ー・）ー

第1話（前書き）

注意：この物語は途中から原作の内容を逸脱する可能性や、当然タイトルのごとく原作ぶっ壊しに走る可能性もあります。更に、他の作者様とネタが被るといふことも起こりうるでしょう。そして原作の内容を覚えていない、もしくは原作の知識が不十分な場合もおそらく、というより必ずあるでしょう。その際は感想にて私にお知らせくださると幸いです。最初はF a t eの世界に行こうと思います。以上の点を踏まえて、まあ見てもいいんじゃないかね？と思ってくださった方はどうぞ先にお進みください。てか、見て、感想ヲクレbでは。（更に厨二要素含むかもねw）

第1話

第1話： てか今日何日だっけ。

意識が覚醒し、眼が開く。すると、そこは遠坂邸であつた（汗）

そしてアーチャーがこちらを警戒して見張っている。これは怖い。
そして拙い。

『ナオトさんをF a t eの世界にとばしたです。』

神様の声が頭に響いてくる。

（ブッ、なんでまた… F a t eの世界こそ死亡率高けえよ。）

『それでこそ修行になるというものです！！まあチート能力だし、原作の知識もあるみたいですから、修行にならない気もしますが。』

『あと、チート能力は確認してくれて構わないんですが、最初から筋力などはチートじゃないので、そこは了承してくださいね』

S i d e i n

サーヴァント・アーチャーの召喚を完了させた。そして、セイバーじゃなくってアーチャーだったことも加え、いらついていた私は令呪を1つ使ってしまったわ。ホントに何やってるんだろ、わたし。

アーチャーに名前の交換をと言われたからお互い名前の交換を済ませただけけど…。そのあとに急に魔力を感じたから、外に出てみると、気絶しているやつがいるし…。気絶しているこいつは一体何なのかしら。私と比較出来ないほどのばかでかい魔力がこいつから流れ出ているのが分かるから、こいつはサーヴァントではないのかと疑ったけれど、アーチャーもそれはわからないらしいわ。

つまりこいつが何者なのか分からない。

冬木のセカンドオーナーは私。だから私はこいつの正体を把握しておかなければならない。それにもうすぐ聖杯戦争も始まるしね。

「こいつは何者かわからないのだ。今のうちに処分したほうがよいのではないのか、凜。」

「ダメよ、アーチャー。こいつが魔力を持った只の市民とも限らないわ。処分するわけにはいかない。様子を見たいわ。アーチャー。見張ってお……いて……。私は少し眠るわ。」

S i d e o u t

赤いコートを羽織る青年は、少年への警戒を緩めずに凜を寝室に連れて行き、

「フム、やはり召喚の際に使用した魔力は大きかったか。仕方のないことだ。それよりもこいつは……」

未だ目を覚まさない少年を見る。

サーヴァントであるならば非常に危険極まりない。しかし、凜が令呪をもって私を従えた命令である、主に逆らわない、というものに逆らうことはできないため、容易に処分することはできない。さて、どうしたものか。

とっていると少年は目を覚まし、数分間固まっていた。

取り敢えず現時点での能力を確認しよう。

？ネギま！・なのは現時点での魔法を全て使うことができる。

しかし今デバイスもないし、魔法使用の練習さえしていない。そのため使えるようになるのはもう少し後になるだろう。

？アーチャーの固有結界を使用することができる。更にそこから漏れ出した強化、投影も可能。更に視力・弓もアーチャーと同スペック。

？不老不死。

ありがとう、神よ。これで死にくくなった。

？修行すればするだけ力は上昇する。魔力、気は現時点でネギま！のナギの5倍ほど。

しかし筋力、耐久力は以前のまま。修行しなければならぬ。
？フラグメイカ 弱酸性

……弱酸性ってなんですか。俺に一体何を期待しているんですか。
ほんとやめてくださいよね、もう。
？

ある程度のを創造可能。

現時点で使用不可なのはFateキャラ召喚のみ、か。ちょっと不便だけど頑張るしかないw！

「それで、君は何者かね？君からは尋常ならざるほどの魔力が出ている。感知が出来ない私でも分かることだ。」

「それは……」

ここで俺のことを暴露しても構わないのだろうか。少しは原作どおりに進まないといどんなイレギュラーが出るのか分からない。すでに俺がイレギュラーなのだから。

アーチャーは信用できるのか…。していいのか…。

「言えないのか。」

彼からピリピリとした空気が流れてくる。下手なことを言つと本当に殺されかねないような雰囲気だ。

俺はFateのことを知っている。彼のことを知っている。俺はアーチャーのキャラが好きだった。だからアーチャーには話してみようと思う。

「分かった。話そう。しかしアーチャー、いや、世界と契約したエミヤでも俄かに信じられないような事を今から言うだろう。それでもいいか？」

アーチャーからの圧力が更に増す。真名を知られていたからか、あるいはどのような話が警戒しているのか。それともそのどちらもか。

「それを保証することはできまい。君も突拍子のないことだと理解しているのだろうか？」

「ああ、そうだよ。でも話さないわけにはいかないじゃん？だから話すよ。なぜアーチャーの真名がわかっていいのかも。だからここに置いてほしい。戦力になることを約束するよ。」

自分が異世界から来た存在であること、そしてその異世界ではこの世界はゲームであったことを伝えた。しかし、アーチャーが衛宮士郎の存在を消そうとしていることを話してしまえば後々警戒されるかもしれないし…。それは伝えなかった。

「そう、か。確かに俄かには信じがたい話だな。悪いが簡単に信じることはできない。何か根拠となるものはないかね？」

証拠、か…。アーチャーの魔術を使えるから、それをみせればいいか。

「アーチャー、君の能力は固有結界を使用すること、更にそこから漏れ出す投影とかじゃねえ？それを使えるのは君一人のはず。だからそれを俺が使えば証明できるはずだ。」

何を投影しようかと迷ったが、やはり一番信憑性が高そうなのは干将・莫耶だろう。いつもアーチャーはそれを使っているわけだし、何なのか一目見て分かるはずだ。

「投影、開始」

魔術回路に魔力を流す。

そしてイメージする。アーチャーが使っていた干将・莫耶、中国の剣を。

驚いた。少年の話を聞く限り信じがたいものだったが、この全く同じ工程で投影された干将・莫耶を見ると、信じる他にはあるまい。彼の投影中に一瞬で理解した。

それならば何も言うまい。というより他所にやっちゃってしまっただけでは危険極まりない存在になりうる。

「ふむ。これを見せられては信じるほかあるまい。」

さて、それならば道は1つ。凜を説得しようか。

第1話（後書き）

1日で頑張って作成してみました、s a k i k e nです。

とりあえず、週2ペースくらい、もしかするとそれ以上のペースで進めることが可能のようです。まあ本編は本当にノロい進行具合だけど頑張るんでご指摘、感想、評価待っています。流石に無感想のままだと寂しい・・・OTL

追記：今日もしくは明日中に0・1話を改定します。ト書きになっているのがありありと見てとれるので。でもストーリーとは関係してこないです。

追記に追記：おもいつきりストーリーにかかわっちゃいましたね。すまんです。

第2話（前書き）

注意：この物語は、途中から原作の内容を逸脱する可能性や、当然タイトルのごとく原作ぶっ壊しに走る可能性もあります。更に、他の作者様とネタが被るということも起こりうるでしょう。そして原作の内容を覚えていない、もしくは原作の知識が不十分な場合もおそらく、というより必ずあるでしょう。その際は感想にて私にお知らせくださると幸いです。最初はF a t eの世界に行こうと思います。以上の点を踏まえて、まあ見てもいいんじゃないかね？と思ってくださった方はどうぞ先にお進みください。てか、見て、感想ヲクレbでは。（更に厨二要素含むかもねw）

第2話

第3話：今日も頑張って攻略を・・・え・・・？

さて、やっかいな輩がきたものだ。私の魔術と全く同じ方法で干将・莫耶をつくりだすとは…。凜ももうすぐ起きるだろうし、説得にかかるとするか…。

「あー、眠いわ…」

凜が起きて、リビングに着くと、そこは和やかな雰囲気にもまれていた。

「ナオト、君は家事もするのかね？」

「簡単に、な。それよりもこの紅茶は本当においしいな。執事の資格でも持ってるんじゃないのか、アーチャー。家事といえば、こんな方法をしているか？」

「それは私も知らなかったな。この家の主は本当に家事をしないのでね、早速実践させてもらうよ。」

「……………は？え？アンタ何考えてるの！？私はこの正体不明クンを見張れ、といったはずよ？しかもこうして和やかに！お茶会の真っ最中か！！コラ！」

どうやら相当オツムに來ているらしい。まさに背後に赤い悪魔が見えるようだ。洒落にならん。このままではアーチャーの令呪をもって俺が遠坂邸からおいだされてしまうのではないか。それは非常にまずい…。まあ衛宮邸に行けばいい気もするが。

「じゃあ本題に入ろうか。アーチャー、頼んだ。」

ナオトが凜にあれこれ言っても怒らせるだけだろうから、アーチャーに頼んだわけだ。アーチャーはなんで俺が説明しなきゃならんだ、とでも言いたげに肩を竦めた後、話す。

「わたしがかね？やれやれ…。凜、こいつは敵ではないよ。敵では

ないどころか、こいつはこの世界の人間ではない。」

何を言っているのか、と今にも言いそうなのをこらえて、凜は聞く。
「ったく…。その根拠は。」

「ナオトが私と同じ魔術を使ったことだ。この魔術を使えるのはこの世界でただ一人…。私だけだ。そこから判断した。ナオトの前で言うものではないが…。まだ正直信用できないというのが本音だろう。もしかすると、彼が聖杯戦争において敵に回るかもしれない。それは非常に危険だろう。」

「で、私は何をすればいいのかしら、アーチャーさん？こいつのことを信じろって？それはちゃんちゃら無理な話よ。同一の魔術を使ったのは偶然かもしれないじゃない。こいつは有り得ないくらい魔力を持ってる。こいつは敵かもしれないのよ。分かってる？もう私たちの聖杯戦争はもう始まっているのよ。」

聞く耳をもたない凜には今何を言っても無駄だと思ったのか…。アーチャーは簡単に説得をやめてしまう。

「むう……。すまない、ナオト。説得は難しいようだ。」

「ん、まあ遠坂凜の性格はゲームを通して知っているわけだし、大丈夫。あいつの家にでもいつてみるさ。」

「そうか、また会おう。」

「ああ。じゃあまた。」

衛宮士朗はいつも通りの生活を送っていた。この日までは。

朝。

家のチャイムが鳴る。士朗は桜が来たのだろうと玄関に行き、戸を開ける。しかし、そこにいたのは桜ではなく、俺と同じような年の少年だった。

「すまない、君が衛宮士朗で間違いないですね。」

「そうだけど…君は？」

「俺はナオトって言うんだ。今家がなくて、非常に困っているんだ。それを遠坂邸で相談したら、ここに行け、といわれたもので。」

「そうか、わかった。ナオトは泊まる場所がないんだろ？ならいくらでも泊まっていてくれ。」

「ありがとう、士朗。よろしくな。一応俺は士朗の1コ下だから宜しく頼む。」

「こちらこそ。部屋は沢山空いているから、どこを使ってくれても構わないからな。」

「ああ。」

「俺は学校があるから行くが、ナオトはどうするんだ?。」

「俺は事情があつて学校に行けないんだ。だからココにいるわ。」

「そうか…。じゃあ、いつてくる。」

学校にて

「おい、えーみやー。こことここ、直しておいてくれよ。あと、道場も磨いとけ。」

「ああ、わかった。慎二、これからどこかに行くのか?。」

「見て分らないのかよ、お前。デートだよ、デート。これだから衛宮は……。もういい。あばよ、衛宮。」

衛宮は断る、ということを知らない。この日も先生から生徒までの頼みごとを受け、奔走していた。慎二からの頼みごともあり、気が付いたら、校舎は夕闇に包まれ、奇妙な雰囲気かしていた。

キンッキンッ

音が聞こえる。グラウンドからだ。さまざまな頼みごとを完遂し、疲労していた彼は、重い足取りで音が聞こえる場所まで行った。そこには、赤い奴と青い奴が戦っていた。ツ……。息をのむ。青が目にもとまらぬ速さで何かを突き出す。それを赤がいなす。赤は防戦一方かと思うが、青の攻撃をいなした際に隙ができれば攻撃をしている。すると青が赤から距離をとり何かを話した。そのうち、青は構えをとり、その場に自分はいないというのに、自分が殺されるのではないのかというほどの殺気が届いてきた。

拙いまずい不味いマズイ……。逃げなければ……。今なら逃げられるかもしれない！

「やはり、強いな。ランサー。」

「てめえが言うかよ、アーチャー。二刀使いの弓兵で、ココまでついてくるやつなんて聞いたことがねえ、なにもんだ、てめえ。」

「それをいう君は…雷神のごとき槍捌きと、その槍…君は」

「俺の正体があったのなら何もいわねえ。我が必殺の一撃を受ける！」

「こい、ランサー。」

いくぜ、ゲイ ザッ

「誰だ！チツ、邪魔が入ったか。この勝負はまたの機会だ。それまで首を洗ってまってな、アーチャー。」

「ふう。終わったわね。帰るわよ、アーチャー。」

「そうだな、ところで、ランサーは邪魔者を消しにいったようだが、行かなくていいのか？」

「…そうだった！早く言いなさいよ！いくわよ！アーチャー！！」

「やれやれ。傍若無人なマスターだな…。」

「…胸を一突きか。もうじき死ぬな、こいつは。」

「最後までいは看取ってあげるわ。巻き込んでしまっでごめんなさいね。」

空にかかった雲が晴れ、月光が生徒の顔を照らす。

せめて顔を見ようと凜が生徒を見ると、その顔は凜の良く見知った顔だった。

「何で…あんたがここにいるのよ…。こいつは死なせないわ……」

そついうと凜は懷から宝石を取り出し、呪文を紡ぐ。

第2話（後書き）

サブタイトルと全く関係がないという罨w

復帰？できるような気がします。
見てやってください。

第3話（前書き）

注意：この物語は、途中から原作の内容を逸脱する可能性や、当然タイトルのごとく原作ぶっ壊しに走る可能性もあります。更に、他の作者様とネタが被るということも起こりうるでしょう。そして原作の内容を覚えていない、もしくは原作の知識が不十分な場合もおそらく、というより必ずあるでしょう。その際は感想にて私にお知らせくださると幸いです。最初はF a t eの世界に行こうと思います。以上の点を踏まえて、まあ見てもいいんじゃないかね？と思ってくださった方はどうぞ先にお進みください。てか、見て、感想ヲクレbでは。（更に厨二要素含むかもねw）

第3話

第3話：原作には忠実にね？

よし、こんなにも旨い味噌汁を作れたのは久しぶりだ………ちよ、ちよっと、待つんだタイガ！その味噌汁にそんなものを入れたら……！ え？ならこっちなら良いだろうとか言ってプリンを入れようとするな！ そのジャムも駄目だ！って、いれるなああああ！

ガバツ……

「なんだ、夢か……。」

真夜中の学校、それも廊下に少年は寝ていた。

「さっきの夢は相当やばかった……やはり藤ねえは台所に入れちゃいけないな、っと。それにしても何で俺はここに……」

制服の胸辺りに、穴ができ、そのあたりにまだ乾き切っていない血がべつとりついていていた。

先ほどの光景がフラッシュバックする。赤と青の閃光のような、舞踏のような攻防。それからの背筋が凍るような感じ……。

廊下でのやりとりと、胸への違和感。力が抜けるような感じ、そして寒さ。

何故俺が正体不明のヤツから刺されなければならなかったのか。あの、格が違うやつらはなんなのか。分からない。分からない。分か

らない。刺された…。つまり俺を殺そうとした…。
つまり、俺が今こうして生きているということは、また俺を殺しに
戻ってくるかもしれない。……ああ、ここは寒いな…。早く家に帰
ろっ……。

「俺がやったFateの知識じゃあ、もうすぐ学校から、一回死に
かけた士郎が帰ってくる。したらランサーが現れて、士郎を殺そ
うとし、セイバーが召喚される、って感じの流れ、だったね。なら
俺は隠れておいた方がいいか。」

ガラガラガラ…

扉を開く音がする。

恐らく傷を負ってフラフラ状態の士郎だ。はじまる、か。

「ただいまっ…、て、今日は一人じゃなくてナオトがいるんだっ
た！おい、ナオ」

大急ぎでナオトを見つけ、危険を伝えようとする。

カランカランカラン

ちよ、まっ…ランサー来ちゃったよw

ナオトは逃げようとする。が、それもむなしく…

「よお、もう一回殺しに来てやったぜ………」

ランサーが忍び寄る。

くそ、もっと早くに隠れておけばよかった、と後悔してももう遅い。

ランサーはもう前にいる。奴と戦って生き延びる可能性が高いのは明らかに俺だけ……！幸いにも今は深夜、俺を士郎だと勘違いしている……！

現在まだデバイスも作成していない、筋トレしかしていない俺が使うのは明らかにエミヤの魔術のみ……！！

「投影、開始！」干将・莫耶を瞬時に投影。2回目の投影だから、体に負担がかかる！しかし背後から繰り出される死の一撃を防ぐためには、そんな些細なことは後回しだ……。

振り向きざまに袈裟斬りを放つ。

「はっ！」

しかし如何に油断しようとも相手は――第4次聖杯戦争　この殺し合い　で最速の英霊、ランサー。

「　おっと！」

そう簡単に当てさせてはくれない。

英霊という存在は夜目が利くのか、その雰囲気からか、はたまた俺の押え切れていない魔力を感じ取ってか　。

「てめえ、さっきの奴とはちげえな。　だが、俺を見ちまったんだ。ここらでいっちょ、死んでもらうぜ！」

常人には避けられない点の攻撃

鍛錬していない俺が退けられるほど甘いものではない。そして、この家の中では防御しづらいし、ランサーの槍はとても長い。だから、絶対に点の攻撃、つまり突きを出してくる事になる。それは危険だから、ここはそこに

「なんだ、そっちにいきたいのかよ、なら俺が行かせてやるよ、オラ！」

そして、土蔵に飛ばされる。

ナオトが応戦みたいなことをしている間に、士郎は道場から大河印の木刀を取ってきていた。しかし士郎がその場に戻ってきた時にはもう吹っ飛ばされていた。

「ナオト！てめえ……」

強化した木刀で、果敢に応戦するも、当然及ばず、土蔵まで蹴り飛ばされる。

士郎が土蔵に入った瞬間に土蔵の中が真っ白な光であふれた。

みつともなく尻もちをつく二人の目の前に、可憐な美少女が立っていた。

「あんなところにアイツがいるとは思わなかったわ…。」
サーヴァント
執事が紅茶を入れる。

「明日会ったらあることないこと一成君に言いつけてやるんだから。」

まさに、フンツと音が聞こえてきそうな程に激昂している。それも当然。彼女は、遠坂家の家宝であり、聖杯戦争の際の切り札となる何年も魔力をため続けた宝石を衛宮士郎に対して使ってしまったのだ。

サーヴァント
そこで執事がピクツと反応する。

「それよりも、私の名前がアーチャーではなく、執事になっているのだが…。それよりも、凜。それは叶わん。この戦争では目撃者は消さねばならない。ランサーはいやいやながらも目撃者を消した。しかし自らが殺したはずの奴が生きていたら、君はどうするかね。」

「……………なんてこと。こうしちゃいられないわ。執事！行くわよ！」
サーヴァント

殺したはずの相手が死んでおらず、生きていると知ったら万人がその相手に興味を示すだろう。そして興味を示さずとも、殺し損ねた相手をもう一度ルールに従い殺しに行くだろう。そういうことだ。
「だから、ルビがおかしいと…！さっきから言っている…！」

あれから、もう既に結構な時間がたっている。士郎の生存にはもう気づいているだろう。急がなくては…！

「アーチャー、急ぐわよ！」

凜が急いた声でアーチャーを急かす。

「ああ。…全く、人使いの悪いマスターだ。しかし、礼を言わせてくれ。」

「アーチャー、さっきから何ブツブツ言っているのよ。衛宮邸はもうすぐよ。気をつけなさい。」

そして、衛宮邸にたどり着いた彼女たちが見たものは、蔵のような建物からでる、溢れんばかりの光だった。

「……………。7人目が決まったようだ。」

「召喚に従い参上した。」

「問おう、貴方が私のマスターか。」

「…え……………?」

第3話（後書き）

今回は、ちょっと文章量が短く見えるでしょう。申し訳ない。
今度はたくさん書くので、今回は見逃してください。
てか、変なところがあったら修正しますので、感想欄に記入をお願いいたします。

評価、よかった点などがあれば、それも受け付けています。よろしく
お願いします。でわ、またの機会に^^b

第4話（前書き）

時間があったんで書けました
見てやってください m () m

第4話

第4話：サブタイトル付けにくい…

「これより我が剣は貴方と共にあり、運命は貴方と共にある。
ここに契約は完了した。」

「マスター、指示を。」

なんと形容したらよいのか…透き通るような白い肌を持ち、艶のある髪、そして端正な顔。こちらがまさにセイバーさんなわけですが。
「…え…？」ちよつとマテw こいつこつち見て言ってるしw
士郎の間違いじゃないの？

「セイバーさんや、これは何の冗談かいね…ワシやあ、最近耳が遠くてのう…」

すぐ横を突風が通り過ぎ、頬から血が垂れる。

「せ、せいばーさん……」

「…ナニカ？ ますたー」ニコッ

笑っているのに目は笑っていないというこのセイバーさん…

「なんてこつた…OTL」

まあまあ、と苦笑いしている士郎。苦笑いをしている程余裕ないし！
「まあまあ…じゃ、ねええええっえ！」

しかし、その声は無情にもセイバーとランサーの剣戟の音で打ち消される。

ランサーの切り払い、突き、いずれも高速で、俺達には見えない。しかしセイバーはそれに対応し、はじき、いなし、隙がないように見えるランサーに切り込んでいく。

「ほう。やるな、アンタ。その身のこなし、セイバーだな？」

「さあ、どうかな？アーチャーかも知れぬし、アサシンかも知れぬぞ？ランサー。」

「ハッ、ほざけ！セイバー！」

ランサーが槍を構えなおし、再び激烈な攻防が始まる。

しかしそのように女の子が戦っている光景を見て、士郎は黙ってられない。土蔵の中にあつた鉄パイプを両の手で握りしめる。

「女の子にそんな危険な事をさせてたまるか！うおおおおお！」

強化した鉄パイプをランサーに突きだす。が、当然ランサーに楽々と躲わされる。

「チッ！おい小僧…てめえ、邪魔したな？もう一回殺されてえのか…。なら、その命貰い受ける…！」

ランサーが背後に跳躍し、セイバー & a m p ; 士郎と距離を空ける。距離を空けられたセイバーは当然距離を縮めようとするが、ランサーから、常人でも分かる程の殺気と魔力が放出される。しかし、真剣勝負を邪魔されたのはセイバーも一緒のこと。

「…ランサー。貴方の相手は私のはずだ！貴方は少々外野の挑発があっただけで、私との勝負を中断してしまうほどの安いプライドしか持ち合わせていないのか！アイルランドの獅子よ！」

「…………言ったな、セイバー。ならばまず貴様からだ！」

「喰らえ、我が必殺の一撃を！」

ランサーから、更に強い殺気と、魔力が放出される。

「刺し穿つ 死棘の槍！」

放ったが最後、因果を逆転させ、心臓を刺し貫くこと必至という魔の一撃がセイバーに放たれる。それもまさに一瞬でセイバーまで到達する。

「っ！」

セイバーは幸運のパラメータが高い。その為、ランサーの必殺の攻撃を避ける事が出来る。

しかし展開を知っているはずのナオトでさえも、この空間の緊張感に飲まれてセイバーが死んでしまうのではないかと危機感を募らせた。

「セイバー！大丈夫か！」

肩から血が滴り落ちる。セイバーは何とか宝具の一撃を逃れたものの、肩を貫かれるという重傷を負ってしまった。

「…何という攻撃だ…。あと数瞬回避が遅れていれば、死ぬところだった…。しかし、まだ私は戦える。行くぞ、ラン」

「チツ…！それはまた今度になりそうだ…。もう一人サーヴァントがきやがった…。ありがとな、セイバー。楽しかったぜ！」

ランサーが物凄い速さで離脱していく。

と、同時に別のサーヴァントと少女が衛宮邸に入ってくる。

「衛宮君、無事!？」

「うえ…? 遠さ…か…? あ…ああ、大丈夫だ。それよりも、遠坂が何でここに?」

「ちよつと野暮用でね。でも、もう貴方には関係のないことよ、衛宮君。それよりも…ナオト君…。貴方が七人目になったのね…。じやあ今はもう敵同士よ。アーチャー、お願い。」

「まったく、人使いの荒い…。」

アーチャーが苦虫を噛み潰したような顔でセイバーに迫る。

「マスター、下がってください。ここは私が。」

アーチャーの一撃をセイバーが受け止め、そのまま鏑迫合いになる。

「ナオト、すまないな。あの後、凜に令呪を使われてしまつてね…。どうしようもないのだ。」

セイバーがアーチャーの剣を弾く。

「そうか…。まああれがあるからいざという時には大丈夫だとは思うけど……。」

セイバーは魔力放出が可能なため、アーチャーよりも強い。その為、アーチャーは防戦一方に追い込まれる。アーチャーはあえて自ら隙を作り、セイバーの一撃を誘導する。その敢えて作つた隙に打ち込まれる攻撃をアーチャーが防御し、何とか均衡が保たれている。

「なんと…。ワザと隙を作ってそこに攻撃を誘導するとは……。感服しました。そのような防御法もあるとは思わなかった。ではこちらも全身全霊をもって貴方を迎え撃ちましょう。風よ」

「二人とも、喧嘩は止めるんだ!!」

僅かに剣戟がやんだ為、士郎はセイバーとアーチャーの間に割り込み、凜に向かって叫ぶ。

「遠坂、なんだってこんな喧嘩をしてるんだ!止めてくれ!遠坂はそんな奴じゃないだろ!?!」

「っ!?!あなたっ…。もういいわ、今回は衛宮君に免じて許してあげる。でも、次から容赦はしないわ。帰るわよ、アーチャー!」

やれやれ…と言わんばかりに肩をあげるアーチャー。

凜は帰ろうと踵を返す。しかし、ここで何もリアクションせずになのま帰ってしまったてもいいのだろうか…。

「待ってくれ!同盟を組まないか?遠坂!」

「……何を言うかと思えば……。」

遠坂の足を止め、こちらを振り向かせたのはいいものの、彼女は呆れたわ、とでも言うようにハア、と息を吐く。

「なあ、士郎もそう思うよな?」

「ああ、そう思う。」

「厭よ。」

遠坂が明らかに嫌そうに言う。

これは、本当は言いたくなかった事だが、これを言うしか同盟を組

むフラグが立てられそうにない、ということとで、

「…そうか、遠坂の妹が今どんな状況に陥っているかもわかっていてんだな…。」

遠坂は急に取りみだしたようにナオトに接近する。

「何で私に妹がいるってことを……！」

ナオトは飽くまでも冷静に返答をする。

「だから、俺が遠坂の家に行ったときに言っただろう？俺の正体について……。俺は今後の展開……というよりこの世界について知っているんだから。」

「遠坂の妹が危険だ……。俺は君の妹を救おうと思っている。だから、手を貸してくれ……。」

遠坂は妹が話題に出てから俯いており、ナオトの話を聞いている。

「…………。分かったわ…。彼女を話に出されたらどうしようもないわ。たった一人の肉親だもん…。手を貸してあげる。でも、主導権は私に握らせてもらうわ。それは良いわね？あと、まだ完璧に信じ切れたじゃない。だから、信じきるに足る証拠を見せてくれないかしら。」

ふう……何とかなったか……。遠坂 K O E E E E E E E E ! O T L
信じきるに足る証拠、ねえ……。これからの展開としては……

まさかの言峰教会に七人目のマスターとして登録しに行く。

バーサーカーさんと軽い会合

分岐（・・・）と乙であります！
て感じか…。

というか、もう俺がなんちゃって主人公の枠に収まつてゐるわけだから分岐がないのか……!?（汗）　つまり、自分で決めなきゃいけない……!?!? ヤバい……………;; ……()()()()()
 ゝガクガクブルブルガタガタブルブル
 兎に角、ここまでは一緒のはずだからそれを言おう。

「とりあえず、今から行くところは言峰教会。んで、教会からでたらバーサーカーさんことヘラクレスさんとの触れ合いがあるね。」

一同（士郎を除く）の顔が驚愕に染まる。

「ヘラクレス!？」

「ああ、そうだよ。ヘラクレス。なんか、12回殺さないと消滅しないって言う宝具だったよ、うん。確か、十二の試練。」

「なんてこと……。それなら同盟を結んでおかないと本当に拙いわね……。でも、それが分かっただけでいいわ。分からない状態で戦闘に突入するのと、分かっている状態で戦闘に突入するのでは全く違うし。よし、これで少しは対策が立てられるわ。ありがとう、ナオト。それじゃあ行きましょうか。」

確かに対策を立てることはできたが、そのまま行っても損害は大きい。だからちよつと修行してからいかなうとな。と考へて、一時間が一年の結果を作つた。

「行って、行こうとしてるそばから、何してんのよ、アンタ！」

遠坂の後ろにアカイアクマが見えるような…。さっきの戦闘でおかしくなったのかな…気のせい…ということにさせてください…。

「何って…。結界作っただけだけど…。一時間が一年になる。…まあまあ、今すぐ行かなくてもいいじゃないか。実際に遠坂達が教会に行った時間まで、後1時間あるんだし。」

「そういうことじゃなくて……。そんな出鱈目なもの、普通の奴に作れるわけがないでしょう！分かってるの！？」

その出鱈目さに、遠坂が激昂する。結界を作る、ということは上級の魔術に入るが、時間を遅行させるような魔術は珍しく、そういう類の結界を張るなら、通常複数の魔術師が協力して行う。それを一人で、それもなんの綻びもなく、疲労を全く見せずに行ったから遠坂は出鱈目だ、と言っているのだ。

「まあまあ……。」「さっきからまあまあ、としか言っていない気がするぞ、士郎。」

「まあまあ……。…じゃないわよ！衛宮君！！さっきからまあまあ、しか行っていないんじゃないの？」

ほらいわれたよ。士郎落ち込んでるし。

・
・
・
・
・
・

なんとか凜の気を鎮めた所で…

「じゃあ俺は一時間程修行してくるけど、士郎もきてくれ。どうせ皆をほっとけないだろ？なら死なないように鍛えないと。あと、アーチャーとセイバーも。遠坂はどうする？」

「待つてるからいいわ、行ってきた。誰かが来たら知らせるわ。」

「わかった。じゃあ行こうか。」

「そのまえに。マスター、貴方をなんと呼べばよいのですか？」

「すっかり忘れてた…。俺の名前はナオト。よろしくな、セイバー。」

「

「こちらこそ、ナオト。では行きましょうか。と、その前に、ナオトはなぜ聖杯戦争の展開を知っているのですか？」

「またまた、すっかり忘れてたな…。今は誰の監視もないようだから、正体をばらしても大丈夫か。」

「簡潔に言つと、俺は異世界から来たんだ。この世界の事はゲームを通して知っていた…。ただそれだけのことだよ。」

「なんというか、本当に出鱈目なのですね、貴方は。」

「いやいや…。とりあえず、修行、始めようか！ローテーションみたいな感じで、皆が回るようにしよう。当面は士郎、アーチャー、ペアで行くからヨロシク。あと、おながが減ったら、ここに俺が作った食べ物があるから、大丈夫。結界は頑丈に出来ているし、本気を出しても大丈夫。一番懸念されるものである魔力なんだけど、結界から皆に供給されるようになってるから、大丈夫。」

そういつて、その瞬間から近所の大迷惑になるような絶叫と剣戟の音が小一時間ほど続き、遠坂さんがブチ切れてしまったとき、ちゃんちゃん。

第4話（後書き）

本当にたまたま時間が取れたので投稿しました。
よかったら見てやって、感想をお願いします。
どんな辛辣なものでも構わないですし、甘い言葉でも構いません
よろしくですノシ

P・S

ルビがおかしいと気付いたw
全角ではだめらしい。なんてこったw

第5話（前書き）

前書き：この小説は（ry

まあ書かなくても大丈夫！なはず！……だよね？今回から軽いチ
ートになるような気がします。追記：ならなかったですw

第5話

そして一年後、僕らは戻ってきた…。

まあ勿論一時間後ですけどね、はい。

1時間後に戻ってきた俺たちを待ち受けていたのは、衛宮邸に侵入してきた少女×野獣でも、似非神父でも金ぴかでも無く、もっと恐ろしいヤツでした。

答えられる人はいますか？ はい、アーチャーくん。

はいそうですね、まさにアカイアクマと形容するのが相応しい人ですね。

アーチャーをしばき倒しながらさっきの事を言う。

騒音を通り越して轟音になってたわよ！by遠坂

一応俺も結界に防音の機能を付けておいたんだけど、あまり効果は無かったらしく、近所のおばさんから苦情が殺到したらしい。勿論苦情を聞いたのは全て遠坂だが。

遠坂が額に青筋を立てながら言う。

「本当に強くなってきたんでしょうね。」

強くなつてない、なんて冗談を言ったら、間違いなくガント乱れ打ちされて呪いを一身に受けて死亡、ってなってしまう。新聞の一面

に掲載されるかもしれない…。

昨日衛宮士郎さんのお宅で、警察がなんぼのもんじゃない、と叫びながらぐちゃぐちゃの遺体を殴っていた遠坂ピーさんをタイーホしました。彼女は、私は優秀な魔術師で、や、あいつが結果を、冬木市はもう聖杯戦争中だ、など、意味不明なことを言い続けており、心身衰弱の状態の疑いがあるとして、精神鑑定を待っているとのこと。

はっ！こうなってしまうんじゃないのか！？と、内心ビクビクする。「ああ。アーチャーとセイバーはそんなに変わらないけど、俺と士郎はかなり強くなったよ。俺の強さはどのくらいの強さかというと、バーサーカーと一騎打ちをして、10分で勝つ位。士郎の強さは、アーチャー並みかな。」

「なによ、それ…。サーヴァントなんていらないじゃない…。」
啞然とした様に遠坂は言う。

ちよつと経って落ち着いたのか、凜がちよつと拗ねたように言う。
「それよりもナオト。なんで貴方にセイバーがくつついているわけ

「？」

「結界の中で色々セイバーと話をしたんだよ…。セイバーが聖杯を求める理由は知ってる？それについてとか色々。なんか分かんないんだけど、そここうしてるうちにこんな風に俺に抱きついてくるようになった…。俺に抱きついてもいいこと無いだろうに…。」

「……………」

そう、ナオトは超がつく鈍感男なのである。

「で、士郎。貴方は何ができるようになったの？」
俺から方向転換して士郎に質問する遠坂。

「ごめんな、遠坂。俺が出来るようになったことは、まだ言わないようにとナオトに口止めされてるんだ。…て、なんで急に下の名前を呼ぶようになったんだ？」

「えみやくん、で5文字でしょ？非常に呼びにくいだよ。作者も描きにくいって言ってるのよ…。」

「作…なんだって…？聞こえなかったぞ、遠坂。」
まさにメタ発言…。

「どうでもいいことよ。それより、いまさらだけど、なぜ貴方はマスターでもないのに聖杯戦争に参加しようと思ったの？」

そういえば士郎は凜にその理由を言っていなかったな。

凜は、士郎が生半可な覚悟で聖杯戦争に参加するというのなら殺しても辞めさせるといいう意気込みのようだ。

「正義の味方だ…。」

「え？」

良い大人になってそんな言葉を聞くとは思っていなかったらしく、キョトン、としている。

「正義の味方だよ。遠坂。この世に救われない人がいちゃいけないと思うし、今回セイバーみたいなかわいい女の子まで参加してるんだ。そんな子が戦うような戦争なんて間違ってる。それに俺ももう当事者の一人だ。だから尚更こんな戦いは止めなきゃならない。全てを救う正義の味方なんてものは存在しない。それはもう分かっている。でも」

「そう、貴方の覚悟はわかった。なら何も言わないわ。でも、死んじゃだめよ。それだけは言っておくは。」

そういつて凜達は歩き出す。

「さつき士郎が話してた口ぶりからすると、最近の事件と聖杯戦争の関わりについてももう知っているようなね。知らなかったのなら教会に着くまでに大体説明をしようとおもったのだけれど。知ってるのならもういい。じゃあ本当に行きましようか。」

最近の事件とは、集団昏睡事件のことである。集団昏睡事件は冬木市で既に何件も発生しており、ガス漏れの事故、ということとで処理されている事件のことであるが、実はその昏睡事件の黒幕は、この聖杯戦争で召喚されたサーヴァントだ。その中でもキャスター。彼女は魔力を供給して貰っていない為、このように一般市民から死亡寸前まで精気を吸い取り魔力を得ている。

坂を上がると、そこにはひっそりと教会が建っている。

「じゃあ、俺たちは教会に行ってくる。セイバーとアーチャーは門の所で待っていてくれ。」

ゲームの時と同じように、俺の、いや俺たちの目に映る教会は闇の中にたたずむ地獄の門のように感じ取られた。

教会にて

言峰は教会内に入るとすぐに見つけられた。

「言峰神父、俺が七人目のマスターのナオトだ。登録を頼む。」

「了解した。ではこれより聖杯戦争を正式に執り行うものとする。」

「それより、凜。彼は誰だね。」

神父は赤い髪の少年を指差し尋ねる。

「彼は衛宮士郎です。聖杯戦争に運悪く巻き込まれ、今私たちと行動を共にしています。」

「……………ほう、衛宮……………」

神父はさも愉快だ、と言わんばかりに顔を歪ませて笑う。

流石に士郎と凜も気味が悪いとおもったのか、早くここを立ち去ろうとする。

「遠坂……………」

「分かっている。言峰、こいつを巻き込んだのは私たちだから、こいつは私たちが責任をもって面倒をみる。それだけよ。それじゃあもう私たちに用はないから、帰るわ。さよなら。」

そして、教会から出る。誰もいなくなったその中で、神父はこう呟く。

「衛宮士郎。君の願いはようやく叶う。」

門のところでアーチャーとセイバーが待っている。

「異常はあった？アーチャー。」

「いや、今のところはないな。」

「そう。今からがホントにヤバいところだから、気を抜いたら死ぬわよ、皆。」

「分かっている。」

「当然のことです、凜。」

「とーぜん！」

「……なんだよ、俺だってわかってるさ。だから皆してそんな目で見ないでくれよ……。」

「……皆にこうも心配させる未来の英雄なんていないだろwと思った俺は、アーチャーの肩に手を置く。」

「な、なんだナオト！私はそんなやつじゃない！！これは何かの間違いなんだ！聞いてくれ！セイバー！君ならわかってくれるな！？」

セイバーは笑っていることを悟らせないように、顔を俯き加減にしている。

「残念ながら……。」

「」

ぬおおおお！なんでさー！！と以前の摩耗した記憶が少しだけ思い出されたアーチャーは、真夜中の3時位にも関わらず叫ぶ。

……普通に近所迷惑だからね、これ。

士郎の家と凜の家の分かれ道である信号機までやってきた。

「凜、衛宮士郎。近いぞ！」

「わかつてる。」

「……………」

もはやセイバーは何も言わず、ただ構えをとる。

静寂に包まれた闇の世界から、可憐な少女がそつ、と電柱の光が当たる位置に出てくる。

「あら？私の存在に気づくなんて、なかなかやるじゃない。私はこれでも気配を消してきたんだけど。」

少女と野獣がそこにいた。

第5話（後書き）

あとがき

次からはずんずん話が進んでいくかもしれません。

てか、ねむいww

まあ書くことはいつも通りです。感想があればどうか書いてやってください。それを見れば自分の能力向上にもなりますし、それによりよい文章を書けるようになるれば皆様に楽しんで私の書いた文章を読んでもらうことができます。まじ、感想お願いします。

あと、矛盾点などがあっても感想欄に書いてくれれば幸いです。

シリアスもギャグパートも書くの難しっ！描写書くの難しっ！

やべえっす（<'A、>くウワアア！！

ナオトを除く皆「俺たちの影が薄いんですけど…」

作者「んあああああああああああああ」

第6話（前書き）

まえがき…まあ前回と変わらないってことでおk。

第6話

「あら、私の存在に気づくなんて、なかなかやるじゃない。私はこれでも気配を消してきたんだけど。」

「あんたは……………！」

遠坂も戦闘態勢に入りながら、少女に向かって叫ぶ。遠坂も少女の隣にいる強大な気配に死の危険を感じているのだろう。

「ふふつ、自己紹介がまだだったようね。私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ。以後お見知りおきを。」

そう言つてスカート裾をつまみ上げ、お辞儀をする。

「……………凜。別にバーサーカーを倒してしまつても構わんのだろう？」

アーチャーは、イリヤを挑発するかのように言う。

「そんなことも知らない英霊がバーサーカーを倒す？笑える話ね。いいわ、バーサーカー！格の違いを見せてやりなさい！」

主人からの命が下ると、バーサーカーは地鳴りにも似た叫びを発し、アーチャーに突進する。

アーチャーはあくまでも遠距離戦が得意な弓兵。そのため、まさに暴風と化したバーサーカーの攻撃をいなすことは出来ても反撃に転じることは出来ない。三の太刀を合わせた時、アーチャーはバーサーカーの攻撃に耐えきれず後ろに飛ばされてしまう。その際に、ナ

オトと士郎にアイコンタクトがなされた。後はナオト、君の判断に任せる、と。今にもセイバーはバーサーカーを打ち倒そうと攻撃をしたがる様子を見せるが、俺は許可を出さない。

「俺が相手をしてやんよ。」

後ろに飛ばされたアーチャーを追撃しようとするバーサーカーの進路をナオトと士郎が妨害する。少女がそのナオトの姿を見て嘲笑する。

「自殺したいのかしら……。まあいいわ、バーサーカー、そいつを踏みつぶしてやりなさい！」

……。マジの戦場に初めて立つナオトです……。何この巨人！怖ええよ！何この背中が冷たくなるような感じ。気持ち悪っ！これが殺気とか威圧感とかってやつなのかねえ……。まあまあそれはいいんだよ。俺はこいつに攻撃されても死なないし。まあ軽くヤツトキマス力！

「おいおい、俺は路傍の石ころと同じで、簡単に踏みつぶされるような一般市民デブと同じかよwおっと、おっと……。何石器振り回してんの？サルさんでもあるまいし……。」

バーサーカーから繰り出されるのはいずれも必死の一撃。それをナオトは軽々と避ける。

「あれ、思ったより強くないよ？士郎。こいつならアーチャーでも士郎でも倒せるわ。でも俺がこのまま何もしないってのはあれだよ

ね…。避けるのも疲れたし…。
デフレクショ
風楯！」

風がナオトの前方に集まり、盾になる。バーサーカーは声を張り上げ前進しようとするが護りに阻まれて前進できない。その護りを突破出来ないバーサーカーに対して苛ついたのか、それとも焦ったのか…。少女は声を張り上げてバーサーカーに言う。

「何をしてるの！？バーサーカー！さっさとやって！」

「まあいいか。軽く死んでください（汗）」

ナオトはそこらへんの包丁を投影、バーサーカーを切りつける。

「残念ね。そんなものじゃバーサーカーは傷つけ」

「……ザクツ 頭を貫いた音がした…。、とバーサーカ

ーが叫ぶ。

「え？イリヤさん、なんか言っただ？」

「」

第6話（後書き）

あとがき：まいど、s a k i k e nです。ほんととはもつと早くに投稿したかったのですが、英語の課題がウザすぎて更新できず、更に書きだめの消失という最低な展開に陥り、やる気が相当そがれてしまいました。非常に申し訳ないのですが、今回はこれ位にしておきます。次回は水曜もしくは木曜日に更新をします！

だいたいa n n o t a t i o nとかなんやねん！経済学の英文をまんま読んでs u m m a r y書けとか、難易度高杉w w w

……。え？本編に2番煎じがある！？……………だまっとけよ嘘ですすみませんもうしません。

最後に、感想・評価お待ちしています。（、・・・）ノヨロシク
今回短くて非常に申し訳ないです（汗）

第7話（前書き）

これは（ry

まあそういってやぶ。

第7話

戦国時代に、庖丁という中国の凄腕料理人がいた。戦国時代には牛を一頭捌く程の技術や小型の剣はなかった。しかし庖丁という職人は、王の前で牛を見事に捌いてしまった。彼の庖丁を投影したのだ。そして彼は構造といったものの流れを理解し、捌いていた。その捌く技術を再生させてもらった。宝具といえど森羅万象に弱点のないものなんていない。その弱点の様な物が、モノの構造の流れのことだろう。空の境界の式の様な魔眼といった才能ではなくて、技術でも彼女がしているような解体術ができるのだ。そういうわけで、ナオトがバーサーカーの宝具の弱点を突き、傷を負わせることができたのだ。

と、蘊蓄はここまでで、実際は体が勝手にそこに引き寄せられただけですけどね、はい。まさにあの庖丁さんが俺を導きでもしてるんじゃないか、そういう感じがしたよ。

ただの包丁で傷ついた事に驚いたのか、それとも技術のみでバーサーカーさんに攻撃を与えたのがわかったのか、イリヤは茫然自失の様子だ。イリヤさんは愛くるしくて、俺の一番のお気に入りキャラなわけだけど…Fateルート以外、つまりセイバールート以外イリヤは生き残れない。俺の介入で、どのルートになるのかわからないけれど、100パーセントの確率で生き残らせたい。だからイリヤを仲間に引き入れる！…といっても生半可な理由では味方についてくれないだろ、常識的に考えて。ここは聖杯の真実と、自分の正体について話しておこう。

「イリヤ、聞いてくれ。カクカクシカジカ」

・
・
・
・
「え…、それってシカクイムープってこと…！？」

表向きは、7人の魔術師と7体のサーヴァントが殺し合い、残った一組が願いを叶える事が出来る。その為の聖杯戦争であった。しかし、本来は召喚された英霊が英霊の座に戻る際に出来る孔から根源に至るという目的で、遠坂・間桐・アインツベルンの三家によって考えられたシステム。それが聖杯戦争である。

第三次聖杯戦争の際に、アインツベルンが復讐者「アヴェンジャー」というイレギュラーを召喚する。アヴェンジャーは聖杯戦争5日目になって敗退するが、聖杯が彼を受け入れてしまったが為に聖杯は汚染されてしまう。その為に、今の状況で聖杯戦争を行っても、そこにたまる魔力は純粋な、無色透明な魔力ではない。無色透明な魔力であれば聖杯は願望機としてきちんと役割を果たす。しかし、アヴェンジャーを取り込んだ現聖杯は、願い事を叶えようとすれば歪んで叶えられてしまう。例えば世界の恒久平和を願えば、罪を犯す可能性がある人、その子供になりそうな人、その家族、つまりその関連者が全員殺されてしまう。他には、この町で一番強くなりたいと考えれば、町が焼き尽くされ、文字通り一人になる。そして一番強いということになるのだ。

今の聖杯のまま聖杯戦争を続けても表向きの目的はおろか、本来の目的は達成できない可能性がある事。更にこのまま聖杯戦争を続け

ても、イリヤは死んでしまう可能性が非常に高いということを伝えた。

「

凜もイリヤもこの事は知らなかっただろう。セイバー達にも結界の中でこの話をしていない。みんな初耳だ。では一体何ができるのかそれは、このまま聖杯戦争を続け、現れた聖杯を完全に壊してしまうだけだろう。願いを叶えず。本来の目的を果たさせず。

イリヤもそのことを理解してくれたのだろう。宿願を果たせない事が甚だしく残念ではある様子だが…。

「でも、私の体は　！」

そう。イリヤスフィールはホムンクルス。どちらにしろ短命なんだ。しかし今は俺がいる。

「イリヤスフィール、こっちに来てくれ。」

「イリヤ、でいいよ。ナオトお兄ちゃん！」

皆が茫然としている中、イリヤを部屋の隅に呼ぶ。

「い、いや！お兄ちゃん！なにをするの！そこは…！」

「いいではないか、いいではないか…へへへへ…じゃなくて！」

「本当にみんな驚いているみたいだね。こっちの挙動に全く反応を

示さない。お兄ちゃんはお兄ちゃん、別のことを考えているみたいだし…。で、ナオトお兄ちゃん、何？」

「このみんなにはまだ言っていない事なんだけど…。俺は神候補としてここにいる。だからイリヤ、君をホムンクルスから人間にするよ。してみせる。俺が出来なくとも、神様（あまりにも若過ぎて神様に見えないが）にお願いするから。大丈夫だよ。」

「ああ、安心した。」

…あれ？名言を別の人が使っている…。だ…。と…。まあいいや。

10分後には、皆我に返った様子。

「ナオト、それは本当のこと！？」

遠坂は息を荒げてナオトに詰め寄り、先ほどの言が真か偽か問いたです。なぜなら、彼女はこの冬木の土地のセカンドオーナーなのだから。あの大災害を起こしてはならない、あの大災害の様な事が起きる可能性があるならば、その可能性を潰さなければならぬ。

「本当だ…。聖杯は既に穢れている。アンリマユ…この世全ての悪、というものがあつてね？その影響なんだよ。アンリマユは呪いみたいな感じなんだ。例えば前回聖杯戦争のアーチャー。アーチャーはアンリマユの呪いを逆に飲み込むことで受肉した。でもこれは特殊な例。セイバーでさえも一度影響を受ければ黒化してしまうほど強力なもの。残念だけど非常に危険なんだよね。で、彼の名前は分かる、セイバー？」

「いいえ、残念ながら。聖杯戦争終了直前に私と衛宮切嗣が闘ったサーヴァントです。私は前回の聖杯戦争で彼の真名を遂に知る

ことができませんでした。そうですか、私も吞まれて…申し訳ありません…。」

セイバーは確かに吞まれた。そのことに対して、セイバーは迷惑をかけただろうと推測し、謝罪した。そんな関係ないのに。

「いや、そんなん関係ないよ。それはそれ。これはこれ。謝る必要なんてない。彼はギルガメッシュ。古代ウルクの英雄王。

マスターは言峰だった。今回もギルガメッシュは聖杯戦争に割り込んでくる事になる。」

「まあ私も聖杯なんてモノ、必要じゃなかったんだけどね。でもナオトの話を聞くと本当に危険ね…。アーチャー、悪いけど聖杯は諦めなさい。」

アーチャーの本来の目的は衛宮士郎の抹殺だった。ランサーと同じように元より聖杯などに興味はない。しかし彼の目的は未遂に終わった。アーチャーはあの結界の中で衛宮士郎と対話、戦闘し、彼を認めたのだ。

「ああ、もちろん構わない。もとより私は聖杯などといったものは求めていなかった。」

ここで、士郎が一つの疑問を見つけ出す。

「　　爺さんが死んだのは、そのアンリマユとかのせいじゃないのか？セイバーの話し方からしたら、爺さんとセイバーは最終決戦まで勝ち残っていたんだろ？」

セイバーはそうだ、と肯定する。

「だからあんな風に、縁側で死んだのか…。」

彼は士郎を引き取った後、どうもちよくちよく家を空けていた事を士郎が話した。

衛宮切継が話題に上れば、士郎と同じように思索に耽る人もいる。

「そう。だから来られなかったの…。呪いにかかって弱っていく体じゃ、アインツベルンの結界を見つけることが出来ないのも当然…。」

そう、イリヤである。イリヤは彼の娘であり、士郎の姉でもある。

聖杯戦争の後に、イリヤは切継を待ち続けていた。しかし帰ってこない。切継が聖杯戦争終了時に孤児、つまり士郎を引き取った事を聞いた。それで帰ってこないのだと思っていたのだ。士郎のせいで

なんて思ったこともあったが、それは見当違いだった。士郎に若干の疎ましさを感じていた彼女だったが、その疎ましさが消え去り、養子とはいえ、切継の息子であり、我が弟だから、士郎への好感のみが残ることとなった。

第7話（後書き）

うわあああああああ。

色々と忙しくて投稿できませんでした（；´、`）

読んでいてくれたかた非常に申し訳なかつたです…。

また再開するので、ぜひ読んでやってください！

あと、評価、感想などお待ちしています。（´・`・´）ノヨロシク

第8話（前書き）

こんにちは、書きためたのがちょっとあったので、早めに投稿しておきます。

第8話

なんか知らんが、またこの世界ですか…。ホントに…また！この白と黒の世界に来ました、ナオトです…。特に死ぬようなこととか心当たりがないが…。確か、あ後は…。

あの後、俺が皆に聖杯戦争を続けて現れた聖杯を壊すのはどうか、と聞くと皆が賛同してくれた。それしか実際の所方法はないだろうと。そんな話をした後に、イリヤはここで一緒に住む。でなきゃ狙われたときにどうしようもないからね。そういう話をしていたら、遠坂がいつの間にかいなくなっていた。彼女はどこに行っただろう、とか包丁の完璧な持ち方講座を士郎とセイバーにしていたら、彼女が風にでも乗って帰ってきたのではないかと言う位急いで戻ってきた。……………大量の荷物付きで。

「イリヤが住むなら、私も一時ここに住むわ。」
もちろん士郎に拒否権などあるはずもなく、そういう事になった。

それで、包丁をセイバーに持たせたところ、まさに包丁で人を殺してしまうような構えをとっていた。それはそれは危険だった。だから、

「セイバー。持ち方、構え方が全然違っって！！」
「そ…そうですか…。それよりナオト…。」

セイバーに近づきすぎた為か…こんなことが原作でもあったような

気がするが…、セイバーが顔を真っ赤にして俯いてしまった。周りからヒューヒューと何かの音が聞こえるがそれはきつと風の音だろう…気にしちゃダメだ気にしちゃダメだ…。

そうこうして、晩御飯を食べ終え、セイバーと遠坂の裸を土郎とみてしまい、ガントの呪いを受けてしまうが、それは別のお話。その後には皆寝た。

小一時間経ち、じゃあこれは夢なのか。そうか、と結論付け、納得しようとした所で、神様の存在に気が付いてしまった…。彼女は、俺を見ながら半泣き状態だった。そして飛び跳ねていた。そう、彼女は俺が彼女の存在に気付かなかったから飛び跳ね、いつまでも気付かなかったから半泣きになってしまったのだ。

「やっと思付きましたですね…。酷いです、放置プレーは嫌いです。」

神は何かをのたまっているが、気にしないで早速本題に入らせて貰う事にしよう。

「で、死んでもいないし、まだ事態が終了したわけでもない…。じゃあ何で俺を呼んだんだ、神？ん？」

「ナオトさん、ちょっと怖いです…。」

それもそうだろう。人が気持ちよく眠ってる所をこんな意味がわからん状態で連れてこられて…イライラだってするだろうよ。なあ皆？…おつと俺は誰に話しかけていたんだ…。ちょっと会話が成立したからか、すっかり彼女の機嫌は良くなっている。ふんふんふん、とでも鼻歌を歌い始めそうだ。そのうつすい胸を反らして、俺に話し始める。

「ナオトさんには、まだホームンクルスから人間へ戻せる程の力はありませんです。だから、私が代わりにやっておいたです！褒めて褒めて！！」

「ああ。ありが　。」

まあ俺にそれほどの力がないということは自分でもわかっていた事だし、彼女の方からこっちに来て、そして人間に戻してくれたのなら本当にありがたいと、感謝をしようと、頭を撫でてあげようとし　。
目が覚めた。

時間切れが来たのか…？それともさっきのは唯の夢だったのかなあ？なんて疑問に思いつつも、結局撫でてあげられなかった彼女を撫でて、もみくちやにし、感謝を述べておいた。もちろん頭の中で。実際にしたら変態って言われるからね？それは分かってるよ？皆も真似しちやいけないよ！っと、また誰かに俺言っちゃったよ…2回目…か…俺、大丈夫か…？

目が覚めると、朝ごはんの匂いが漂ってきた。今が何時なのか分からないが、十中八九士郎が作っているのだらう。いや、そういえばこの家に遠坂凜も居候しているからその可能性もあるなあ、と考えたが彼女は朝が弱かったはず。だからいつも朝食は抜きだったような…。じゃあまさかのアーチャーの線もあるか…？なんてことを考えながら居間に到着。やっぱり朝食を作っているのは士郎でした。

ちなみにセイバーさんはご想像の通り、俺の部屋で一緒に寝ています。危険があるかもしれないという理由からだ。元々俺から言った

んじやなくセイバーが俺に提案したのだけど、特に断る理由もないから了承した。だが了承したことはやっぱり失敗だったかもしれない。俺が寝ている隣に女の子が寝ているのだ。気になってしょうがない。それ故に眠れなかった。まあその内慣れてくるだろ。しかしセイバーさんの方が俺を気にして気にして仕方がなかったように。一緒に居間に行く途中に一言二言言葉を交わしたのだが、睡眠不足の人特有の、頭が回転しない状況に陥っていた（笑）

今日は、遠坂の命令で冬木市を全く知らない俺と、同じく冬木市を知らないだろうセイバーで冬木探検することになりました。冬木市の事を少しでも知っておかないと聖杯戦争で不利になるかもしれないから、冬木を探索がてらに娯楽施設にでも行ってらっしゃいとのことでした。

「フツ、デートか」

アーチャーが茶化して来た。セイバーは可愛いし、俺としてもとてもうれしい所なわけだ。しかし俺よりもセイバーの顔が真っ赤でした。

バスから降りて近くのゲームセンターに来た。特に寂れてはいないが人気があるというわけでもなさそうな場所だ。そこでこの世界のゲームセンターには何があるのだろうかと見て回った。見て回っている途中に、ある場所でセイバーが立ち止まった。一瞬立ち止まったことに気付かず先に進んでしまったが、俺が先に行ったということにも気付かないほどある一か所を見ている。

「セイバー、どうしたの？」

「あれを見てくださいナオト。あの可愛らしくも堂々とした佇まい。あれこそ百獣の王です！」

「ああ、ぬいぐるみのライオンだね。セイバー、あれ欲しい？」

「な、取ってくれるのですか、ナオト。」

「もちろん。ちょっと待っててね。」

俺が取ろうというと、目を輝かせてお願いします！と言われた。俺も頑張ったんだ…。しかし、俺はクレインゲームが自慢ではないが下手なんだよ…。つまり、どうなるのかは想像に易い。

…お金が2000円は飛んで行きました。

「差し上げますので、お教えてください。彼女さんは、どれが欲しいのですか？」

どれだけ粘ったかは分からない。かなりの時間を費やした。それでも頑張っていると、店員さんが俺たちの所にやってきて、そう聞かれた。疲労していた俺はありがとうと言って指をさす。

「あのライオンです。」

「はい、どうぞ。」

受け取ったセイバーは幸せそうにライオンのぬいぐるみを抱きしめる。

「セイバー、俺ちよつとトイレに行ってくるわ。」

長時間ゲームをしていたからか、急な尿意を覚えたからトイレへ。

「い、いや！やめてください！！」

「いいじゃんか、ちよつと。ちよつとだ。俺だから恥ずかしがってるの？大丈夫、俺に任せて。」

「いや！だれか！」

トイレに入った俺が見た光景は、人を見下したかの様な顔つきをした天然パーマが入った青髪の高校生と、彼に腕を掴まれている同じ高校生と思しき女の子だった。どれくらい前からこの状況なのかは分からない。しかし止めなくてはいけない。女の子がとても嫌がっている。

「何してんだ！こんなところで！警察に通報するぞ！」

男を突き放し女の子をかばえる場所につく。すると彼はチツと言ってカッターをとりだした。最近の10代って平気でこんなことをするよなー、と現実逃避を試みる。それを隙だと見做したのか、それとも興奮して攻撃してきたのかは分からない。少しは痛い目を見てもらう必要があるそうだな。

カッターで切りつけてきた瞬間に掌底を喰らわせ、後ろに下がらせる。下がって少し呻いている彼の後ろに回り込む。そして腕を後ろに回し、その腕からカッターナイフを奪い取る。

戦 闘 終 了

たたーたたーたたーん、と音が聞こえてきそう。

「くそ、くそ、くそ！何で俺ばかり…！」

彼はそう言って逃げに行った。警察に通報すれば高校は同じのようだし、簡単に捕まる。折角セイバーと冬木の探検をしているところなのに、警察に行って時間を取られたくないしね。

女の子は泣き顔のまんまだったが、俺にお礼をいって帰って行った。

「ナオト、トイレが長かったですね。」

「ああ、ちょっと野暮用だね。」

そう話してそのゲームセンターから出た。

第8話（後書き）

書きためが一つ出来たので早めに投稿しました。どうぞ見てやってください。

あと、批判などがあればどしどし受け付けます。
（ ・ ・ ・ ）
ノヨロシク

第9話（前書き）

前書き：前回はなんか文章が安定していなかった様な気がしています。今回も拙い文章ですが、見てやってくださいー（・ー・）ー
P・S・月姫とFateの時代や舞台は違いますが、アルクエイドを入れたかったのでこの部分だけオリジナル設定となります。

第9話

セイバーは嬉しそうにライオンのぬいぐるみを胸に抱いている。：なぜか俺の腕も握っている。このぬいぐるみは先刻までいた微妙な感じのゲームセンターで取った、いや、正確には取って貰った景品だ。ゲームセンターを出たら、何時の間にやら日が傾き始めていた。時間は16時。

12時に衛宮邸から出発したとはいえ、16時になるなんて：俺はクレインゲームにどれだけ時間をかけていたんだ。そしてお金をいくら使ったかは確認したくないという。体感時間的に1000円くらいしか使っていないと思っただけだなあ。集中していて幾ら使ったかわからないから、今はまだ正気を保っていられるんだと思われ。

チーンという音が出そうな感じがする。まあ、このセイバーさんの嬉しそうな顔を見るとそれでも良かったかなと思えるわけだが。

高層ビルが立ち並んでいる場所に来た。地名は新都。ゲームセンターからは徒歩で来ることができる距離だった。この場所はセイバーとライダーが勝負することになる場所だったな。こんなに高いビルを士郎は頑張つて上ったな、階段オンリーだったのに。

ここまで来るのにセイバーは何度も俺にお礼を言っている。ニコニコしながら。正直萌えます。だってそうだろ？セイバーみたいな絶世の美少女が幸せそうな笑顔で俺の腕を離さず、更に有難うと何回も言うんだよ？他の誰でもない、俺に対して。本当に半端ない。

ここまで来るのにセイバーは何回も呼びとめられた、つまりナンパされた。男（俺）が横にいるというのに。男連れでも人を引き寄せる。それほどの魅力ということさ。でも、ナンパ野郎のせいでもしセイバーの機嫌が悪くなってしまうたら…

「何ですか貴方達は。人がいい気分浸っている時に、ここまで執拗に話しかけてきて…。これでは流石の私でも堪忍袋の緒が切れるというものです。今すぐここから去りなさい。できないのであれば…斬ります！」

こんな感じの事をセイバーが言つて不機嫌になり、その後寄ってくるナンパ野郎どもをSATUGAI し始めるかもしれない。…それは言い過ぎかと苦笑いする。

「ナオト、見てください。あれは食べ物でしょうか。」

「屋台か…。」

この腹ペコ王の事だ。お腹をもつ空かせたのか。

昼を過ぎ、夕方に近くなる。夕方が過ぎればすぐに夜が来る。このあたりの時間帯から退社した会社員が増え始めるのだろう。ちらほらとラーメンの屋台であつたりおでんの屋台であつたり…が開店し始めている。英霊は召喚される際にその時代の知識を必要最低限与えられる。実際聖杯戦争に屋台の知識なんて必要ないから知らないのだろう。屋台を見て不思議そうに首を傾げ、俺に尋ねてきた。

「もうセイバーはお腹が減ったのか？まだ晩御飯前だから色々食べない方がいいと思うけど。」

「少しくらい構わないでしょう。さあ、食べますよナオト。」

少しくらい構わないだろう、なんてセイバーは行っていたけれど…俺はセイバーの腹の虫が鳴る音を聞いてしまった。先程までは喜びで空腹感がどこかに飛んで行っていたのかもしれないが、食べ物の匂いを嗅いで空腹感が復活、成長してそれに抗えなくなったのだろう。

少しくらいだ、と言いながら俺の財布から500円、1000円とどんどんお金が飛んでいく…。セイバーさん、少しじゃなかったんですか…。

「ムッ、この感じは、おでんとラーメン！クッ、…ナ、ナオト…どうやら私はこの空腹感に抗うことができない…！よろしいでしょうか？」

「もうどうにでもしてください…。」

隣で俺の財布がすっからかんになっていき、俺の心が悲鳴を上げる中、セイバーさんはラーメン2杯とおでんを一通り完食。計3000円也。

「そんなに食べて、晩御飯は大丈夫なの、セイバーさん？」

「晩御飯は別腹なので大丈夫です！」

別腹ですね、わかりません><；

俺の見たいファンタジー映画が上映されていたので夕方だったがセイバーに許可をとって見させてもらった。何でこつちの世界でも上映されているのかは全く分からないが…。

「そこ！そこです！切り込みなさい！…だから一歩踏み込みが足りない！と先程から言っているでしょう。…ナオト、彼はなんで私の言うことを聞かないのですか。私が言っているのに…。」

「それは映画だから…。」

…なんかこうなるって思ってたよ…？映画なんて知らないだろうし…。セイバーが画面に向かって叫ぶのなんてわかってたさ…！ほぼ満員だった席が今ではもうほぼ空席になっていることなんて知らない…！！

がつくりと頭を垂れる俺の横で未だに興奮しながら映画にコメントをしているセイバーさん。今日も絶好調でした、まる。

それが3時間上映だった為に8時になってしまった。セイバーさんはもうお腹がすいて倒れそうだ、なんてことを仰っている。

「あと少しで家だから。土郎のご飯が出迎えてくれるさ。でも今日は未知との遭遇みたいで楽しかったでしょ？セイバー！」

「ええ、本当に楽しかった。このような平和な時が続けばいいのに、と思います。屋台だったり映画だったり…色々。また随伴させて下さい、ナオト。」

「ああ、モチのロン！確かに、本当に楽しかったな。特にセイバーの百面相が。」

「yεふえがついえh…！」

「今何か聞こえた？」

「？いいえ、特に。」

帰りがけに公園を通りかかった。もう日が落ちて街灯が点いてはいるが、薄暗い場所だ。ベンチ、ブランコ、自動販売機などがある。

「セイバー、ちょっとジュース買ってくるわ。…セイバー？」

良く見ると、女性がベンチに座っている。服に黒い？ものが着いていて、項垂れた様子で座っている。

俺はセイバーにジュースを買ってくると言ったがセイバーに反応はなかった。いや、反応がなかったというのは間違いではないだろうか。逆に彼女は武装し、公園内にいる一人の女性を警戒している。

「ナオト、公園内に入ってはだめだ。アレに殺されてしまう。」

「いや、大丈夫でしょ、関わらなければ。」

ベンチと自動販売機は数メートル離れている。自動販売機でジュー

スを買っている時は背中をみせる事になるから危険性はあるが、項垂れていてこちらにも気付いていない様子。大丈夫だろう、と思ってセイバーに心配ないと伝えて歩き出す。

「…敵の匂いがする…。」

金髪で白い服を着ているが黒い物が着いている女性がぼそぼそと呟いている。

関わらなければ大丈夫だと思っていたが、危険そうだ。

お金を110円投入して缶ジュースを買う。ガッシャンという音と共に缶ジュースが落ちてくる。それを取り、早めに立ち去ろうと後ろを振り向いたら眼前に彼女がいた。それも爪で俺を狙って。咄嗟に無銘の剣を投影し、応戦。しかし運動神経が向こうのほうがやや上。若干の防戦に入るが、セイバーが助けに入る。

「ごめん、セイバー。」

最初は分からなかったが、この女性はアルクエイドみたいだ…でも何でこんな所に…

そこで死んでいる奴って…つまり…遠野志貴？学生服だし…。ナイフ落ちてるし…

アルクを殺したはいいものの罪悪感に苛まれて現場に戻ってくる。そして復活したアルクに殺されたのかな…。確かアルクは生き返った当初復讐してやるとしか考えていなかったはずだからね。これも仕方のないことか。俺たちが協会の手のやつらだと思って攻撃してきたのか。

仕方がない、アルクには悪いけどちょっと痛い目にあってもらいま

す
か。

第9話（後書き）

はいこんにちは。

お休み回にしよつかな〜とか考えていたんですが、この人でもねじ込もうと思ってお休み回じゃなくなってしまうました（；、、）

まあ見てやってください。

で、少し前の話になるんですが、私がルビを付けたと思っていた所は全部ルビがついておらず、もしも不快に思われた方がいたなら謝罪します。自分で確認してみたらルビになっていませんでした。申し訳ありませんでした。

感想まってます！

次は金曜日の更新になると思います。

P.S. 「T京K芸大学マンガ学科一期生による大学四年間をマンガで棒に振る」という81ページの漫画がpixivにアップされていた。それを読ませて貰って愕然とした。怖い。

第10話（前書き）

Q：何かありますか？

A：別にイ：

特に何もないと書くとうとしてこれが思い出されたから書きましたw

今回も見てやってください、宜しく願います。

P・S・月姫とFateの時代や舞台は違いますが、アルクエイドを入れたかったなのでこの部分だけオリジナル設定となります。そこんとこちよつと考えておきます。

第10話

キンツキンツつと、セイバーとアルクの剣戟の音がする。セイバーはやはり若干押され気味だ。それもそうだろう。アルクの身体能力はセイバーのそれと比較にならないほど高い。幾ら技術が高くても補えない差だつてある。

「なんという力…ハアハア…。」

「セイバー、退いてくれ。俺がやろう。」

アルクエイドは志貴に惨殺されたから弱体化して、少し吸血衝動が出てきてしまっているのだろう。志貴の安否は後で俺が確認するか良いとして…吸血衝動を抑えさせる為にはどうすればいいのか。

「悪いけど、アルクエイド、ちょっと本気を出させてもらおうよ。」

「投影、開始。」

ロンギヌスの槍を投影。ロンギヌスの槍は、イエスの脇腹を突いたものとして知られる。イエスの血がついた宝具である。これの効果は、敵を殺す為のものではない。失われたものを取り戻す為の宝具である。ガイウスという人がいた。彼はこの宝具のおかげで失われた視力を回復させることができたといわれている。

ではアルクエイドに使用するとどうなるのか。今の俺の力であれば、本来の担い手と同じ、あるいは更に上の力を出すことができる。例えば、効果に方向性を持たせる事が出来る。ということ、アルク

エイドを突けば一時的に理性を取り戻させ、ひょっこりと顔を覗かせた吸血衝動を抑える事が出来るのではないだろうか。

「ミスつたらすまん、アルクエイド…！消滅を奪還す槍…！」
ロンギヌス

このロンギヌスの槍は、刃が潰れている。俺が潰したとかそんなじゃなくて、最初から潰れている。伝説によると、イエス・キリストをその槍で突いた際に刃が潰れたらしい。

その為殺してしまう心配はない。

ロンギヌスで突いた後、アルクエイドからのリアクションがない。まさか特に効果がなかったのだろうか？と考えていたが、そうではなかったらしい。セイバーが剣を構え、いつでも反撃できるように近寄って様子を見てみると、すうすうと寝息が聞こえる。彼女は眠っているようだ。

「理性を取り戻させた後も俺たちがどうにかしなきゃいけないだろうと思っていたが、大丈夫みたいだね。」

どうやら、俺たちが吸血衝動を抑え込んで、理性が戻った時に自分から睡眠状態に移行した様子。

「ええ、そのようです。帰りましょう。」

「この真祖に勝利したナオトもカッコ良かったです…」

「え？何か言った？」

何かボソツと聞こえたようだが、気のせいかな。セイバーの顔が赤い…？それも気のせい…なのか…？

志貴は…と。お、死んだと思ってたら仮死状態になっているじゃん。
流石遠野！

その内気がつくだろうし、男だろうから大丈夫だろ。それよりアルクだろ。吸血衝動を抑えたのも少しの間。どうにかせにやいかん！
！ただでさえ弱体化しているんだし、吸血衝動がいつ抑えられなくなっても不思議じゃない状態だ。それをどうにかしなければならぬものもあるし、アルクがこちらの力になってくれれば非常に助かるということだ…

「セイバー、彼女を連れて帰りたいと思う。そして治療をして、こちらの力になって貰おうと思う。」

「なっ…！それは危険でしゅ…危険です…」

あ、噛んだ。

「こちらの世界を知っているなら、当然吸血衝動の事も知っているでしょう、ナオト！？それを知っていながら、何を…」

「それを俺が消し去る。そして力を貸してもらうんだよ。」

そんなことできるはずがない、とセイバーが言うが、実は宝具にそれが出来るものがある。宝具の名をリジル。北欧神話の英雄の一人、シグルズの宝具である。その剣は、幻想種の竜の心臓であつても決り取るほど強力なものだったといわれている。かの宝具『全てを握り切る剣』^{リジル}の能力は、その名の通り自分が決り取りたいものを全て決めることが出来るという宝具である。そう、例えば体の一部ではなくて精神や、魂であつても。

「しかし…、大丈夫なのですか？真祖と英霊は敵同士の筈です。私には大丈夫とは思えない。」

「大丈夫。俺を信じて。」

非常に不服そうだが、分かってくれたセイバー。あと、凜やらんやらを説得しなければならぬという事で、頭が痛いわ…。よし、取り敢えずアルクエイドさんは眠ってるし、ここでやっちゃいますか。

「セイバー、ここで宝具を解放するから、周りに人が来ないか注意して見てて。」

「分かりました。」

「全てを振り切る剣^{リジル}！！」

リジルの剣の先から出た青の光が公園内を満たす。その青の光は徐々に輝きを失っていく。まさに剣が死んでいるかのように。そして剣がぼろぼろと崩れた。それとともに、グサツだのパリン、だのネチョッだの、なんと表現したらいいかわからないような音が聞こえた。多分吸血衝動が壊れてなくなってしまった音だったのだろう。アルクエイドをみると、若干だが苦しそうな表情が和らいでいる気がする。

アルクエイドの吸血衝動が出てきたのは志貴を仮死状態にした時に彼から出た血を見た所為ではないだろうか、なんて今更なだけだと思った。

「よし、多分大丈夫。帰ろうか！」

常識的に考えて、アルクエイドをここにおいてはいけないからとりあえずアルクエイドを衛宮邸に連れていくことにしよう。

・
・
・
・
・
・

「真祖アルクエイド・プリュンスタッドの姫君を連れて帰ってきたあ！？返してきなさい！今すぐに！タイムマシンよりも早く！ダッシュダッシュ！」

はい、連れて帰ってきました。もちろん、俺がアルクエイドを持つとうとしたんだけど、セイバーが何故か許してくれず……。結局セイバーが彼女を持って衛宮邸まで戻ってきました。帰ってきたと分かった瞬間に俺はちよつと疲れていたから溜息をついてしまったけど、それは気のせいだ。帰りが遅かったからか、皆心配してくれた……のだがそれも一瞬だった。

「まあまあ……」 士郎のまあまあスキル発動！！しかし誰からも相手にされなかった！！

「だから、もうアルクエイドは大丈夫だって。吸血衝動も消し飛ばしたし……」

何とか言いたいことを言った俺。皆理解はしてくれている。あーだこーだ話していると、やはり五月蠅かったのだろうか、

「喧しい人はご飯抜き！」

なんて士郎が言い始めた。絶対これ相手にされなかったから、

その腹いせだろ…。

「クスクス…ハッハッハ！面白いな、この人たちは！」

急に喋り始めたから凜たち反対派は警戒する。セイバーは警戒どころか、家の中に入った瞬間から蕩けてしまったかのようにずずず、つとお茶を飲んでいるのだが。

「ああ、起きたのか。」

「ええ、起きたわ。有難う！で、さっきの話だと私に協力してほし
いて？ナオト。」

「ああ、そうだ。そうだけど…」

それはそうだが…なんで俺の名前がわかる？

考えている事つてのは顔に出るらしい。彼女は、さっきの会話を聞きながら薄眼を開けてみていたんだもの、皆の名前はもう分かるもの！とおっしゃった。

「当然よつ。ナオトがどんな魔法を使って私の吸血衝動（欠点）をなくしたのか興味があるもの。ナオトと一緒にいる！」

…でも何か大切なことを忘れているような気がするのは俺の気のせいなんだろう…？

第10話（後書き）

後書き：リジルは北欧神話のニールンゲン伝説に出てくる伝説上の剣ですね。ここに書いた宝具としてのリジルの設定は当然オリジナルの設定です。そこんとこ頼みます。それにしても頭痛い…。後、Fateの世界に月姫を出しましたが…。どちらも同一世界なので大丈夫かな？とか思いました。大丈夫…だ…よね…？おうふwアルクの口調がわかんねえw
その内修正します！

感想・評価頼みます！お気に入り登録数が上がらなくてワロタ。なにしろっていうんだよw

第11話（前書き）

あ、こんにちは。 s a k i k e nです。感想非常にありがとうございます。

今後色々あると思います。指摘をしてもらえれば非常にありがたいです。宜しくお願いします！

で、タイトル「いろんな！？世界をチートでぶっ壊せw！？」から変更しようかな…なんて考えてみたりしているのですが…

もしもいい題名の候補があれば感想欄とかでお教えください！お願いしました！

第11話

なんというゴスロリ…なんという幼女…。俺も下手をしたらロリコンになってしまいそうだ…。

「なつてもいいよ、ナオトお兄ちゃん。」

あれ…。俺の声つてもしかして漏れてたの？この発言の所為か、セイバーさんが俺を白い目で見てきます。…なんということだ…。

ご察しの通り、今服屋さんに来ています。誰の？勿論イリヤさんの服。イリヤさんはアインツベルンに、まさに聖杯戦争の為だけに生かされてきた。その為最低限の洋服しか持っていない。

朝寝坊した俺は、ご飯のお預けを喰らい、俺に殺気を向けてきたセイバーさんを平然と見ながらそう考えた。セイバーにこんな落ち着きがないのは、ナオトが寝坊してまだ起きてきていないからだと思え。そんな凜のストレス発散先は士郎とアーチャーである。俺が居間に到着したとき、士郎は見えない何かで拘束されてもがいており、アーチャーは何をされたのかは分からないが、空の鍋を混ぜていた。ブツブツ何を言っているのか流石に分からなかったが。ちなみにアルクはもうご飯を食べ始めている。イリヤも右に同じ。

爽やかな朝だな。俺は皆に清々しい笑顔を向ける。気分はシュワちゃん。

「おはよう。…てかこの混沌とした空間何？怖い。」

セイバーさんは何故か震えている。俺はセイバーさんが殺気を向けてきた理由は分らない。まさに噴火する0.5秒前…。

「俺ちよつと考えてたんだけど、もしかしてイリヤ着る服なんて持っていないよね？」

流石に直球すぎるかな。

「う、うん。私は聖杯戦争の為にこれまで生かされていたようなものだもの。そんな人に着るものなんて沢山はいらないでしょ？」

ちよつとやつぱりヘビーだった。でも聞いてよかったな。

「でもお金はどうするんだよ？」

士郎も凜も良い提案だと賛成してくれているようだが…。

「ああ、俺の財布の中に何故か30万円入ってたから大丈夫。」

「そう。じゃあ行くわよ皆。流石にこんな真昼間から仕掛けてくるようなアホマスターなんていないでしょうからね。」

士郎は何故か張り切っている。もしかやロリコンなのか。ハッと気がつくとアーチャーも復帰している。やはりか…

「士郎…ロリコンだったのか…。」

士郎は俺の言葉に反応して、いや違うぞ。といった。しかしこの反応の素早さは異常。やはり俺がこつという疑いをかける事を予想していたか…！やはり真性のロリコン…！

「でも昨日のお医者さんごっこは楽しかったね、お兄ちゃん。でも

ハアハア言いながらあんなところ触ったらレディに嫌われるわよ、
士郎お兄ちゃん。」

やっぱり真性のロリコンだったのか。だから公園でイリヤと遊んだりしていたのか。これで物語は繋がった……！！！！

「な……！」

それはばらすなっっていったらう、という口止めをしていたにも関わらずイリヤがバラしたからなんてことをしてくれたのかと、そういう反応なのか。

「シロウ……なんということだ……小さい子供にまで手を染めるとは……。それは異常性癖だ！」

「ち……違っぞこれは。なにかの陰謀だ！遠坂は分かってくれるよな……！」
近づく士郎を掃う凜。

「ごめんなさい、衛宮君。私はそんな性癖認められないわ。私たちの家に入ってこないで……いや、半径5メートル以内近づかないで。警察を呼ぶわよ。」

「私は、シローのことどーでもいい！ね、ナオト！でもナオトには近寄らないでね。」

一人我関せずの人がいます。それは気のせいかな。あれ……？ということとはアーチャーもロリコン……！？

結界の中から出た時に、実はアーチャーの真名も分かるのではないのか、と凜に聞かれた。俺は皆に彼が士郎のなれの果てだということを話した。つまり皆知っているわけで……。皆そういう風に考えが至ったらしく、アーチャーからも距離を置いている。精神的な意味

でも、実際の距離的な意味でも。

「わ、私は別世界のエミヤ。私はヤツとは異なる……！皆そんな目で見ないでくれ……！エミヤシロウ！なんとかいえ……！」

「ついていくんじゃねえ、追いついてきやがれ……！」
……。追いついちゃだめですよ、アーチャーさん。

精神が壊れかけ士郎はトリップしています。

「軽い冗談よ、ねえ士郎お兄ちゃん。」

本当に楽しいなあ満面の笑みを浮かべてイリヤがネタばらし。

「……」なんだ冗談か。「……」

「俺は士郎・アーチャーが清廉潔白だと信じていたよ！無実が明らかになって良かった……！」

「……」
しかし一旦育ってしまった疑惑の芽はなかなか拭いきれないわけ……。また士郎が幼稚園児をぼんやり見ている所をアルクに発見、俺に即報告され、疑惑が再沸騰することになるが、それはまた別のお話。

そんな風に、衛宮士郎が擦り切れていったのってこんなんが原因じゃないの？って感じの会話が繰り広げられた。そうこうしていると服専門店に到着。冒頭に戻るのである。どうやら俺は別にロリコンになってもいいそう。セイバー・アルク共に顔を赤らめながら、
「す……少しなら構わないでしょう……。」

「ナオトなら大丈夫だもん！」

どちらも別に構わないらしい。重度にならなければ。

士郎、合掌…。ここにきて士郎と俺の扱いの差というモノが現れてきた…。まだ序盤だというのに…（笑）

イリヤが選ぶ服はどれもお淑やかな服。それを何点か俺に良いか、と聞いてきた。是非もなし…！！

結局下着なんかも買って帰ることとなり、俺の財布から3万円は消えて行きました。…別に落ち込んでなんかいないよ。

ナオト「あ、いろんな！？世界をぶっこわせw！？という題名ですが、なんか題名をもの凄く変えたいのです。私も題名候補を考えるので、もし題名で良い感じのやつが浮かんだら感想欄でもどこでもいいので言っして下さい！それにするかもしれませんが。」

士郎「に…似たような話がどこかにあった！？ま…まあ気のせいだぞきつと。うん、きつと…。」

第11話（後書き）

はい、そういうことでした。ちょっと月姫の方も進めたい所ではありますね。頑張らないと…。

あ、そうだ。このまま続いていけばの話ですが…

私が好きなハイスクール・オブ・ザ・デッドに行きたいような気がするんですが…皆はどう思いますか？というか分かりますか！？

そのあたり感想・評価お待ちしております！！

題名候補あれば宜しく願いしました！！では。。。

第12話（前書き）

こんにちは。私は基本的に朝の7時に投稿していきたいと思っています。∴ というか現在進行形で朝の7時に投稿しているわけですが
∴（；、、）

それでは今回も宜しくお願いします。それと、こいつ口調ちげーよ、とかあればどしどし言って下さい！

第12話

イリヤの洋服や下着類を買った俺達。イリヤがもの凄く喜んでいて、それはそうだろう。あの神ともう一度あそこで会った夢（俺はあどけなさの残る彼女を犯罪レベルで撫でまわしてしまったかもしれない）ということとは余談だが、その後、イリヤが俺たちにこっそりと教えてくれた。自分は聖杯戦争の為にだけに生かされていたホムンクルスであったと。今までは聖杯の器として調整を受けて、体に耐えがたい苦痛を受けていた事。その為に自分は長くなかったであろう事。しかしナオトがホムンクルスという化け物から皆と同じ人間にしてくれたこと。普通の生活を送ることが出来るようになった事。だから今からはファッションなどにも気を配ることが出来るようになったと。魂を人形に移し替えるとか、そんなややちなもんじゃあ断じてねえ、もっと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ…。なんてその時最高にハイだったのか、某ボルナレフばりの事を言っていたが皆敢えて反応していなかった。あの後我に返ったイリヤは布団なんか顔をつずめて悶えていただろうことが容易に想像できる…。まさに黒歴史化決定だね。

つまり今回の洋服購入で、改めて自分が人間であるということを実感したのだろう。

「ありがと、ナオトお兄ちゃん。」

そう言っただけの頬っぺたにキスをしてくれました。凜は土郎と話していたためそのシーンを見てはいなかったが、その他の人たちはそれを見ていた。その中でもアーチャーが、

「…凜！ナオトがイリヤにキスを強要し」

なんて事をのたまいそうになったので、腹を殴ってその言葉を阻止、

マグダラの聖骸布で拘束・引きずるといふ刑に処しました。そんな、士郎ならともかく、俺にまで被害を与えないでよ。…セイバーもアルクも、ライダーもこっちを白い目で見てくるし。 口リ
コン疑惑が俺に向いちゃイヤ!!

ん？ライダー！？

「え、あれ、今…ライダーが…。」

ライダーがいたような気がするが…。まあ気のせいかな。

アルクは対抗意識を燃やしたのか、逆の頬っぺたにキス。

「へへへ。キスしちゃった。」

なんて事をしていた。まあそれでセイバーが何も言わないというのも甚だ可笑しい話だね。

「な…な…な…!!!」

顔をこっちに向けて、石化の邪眼の影響下にあるかのごとく動きを緩慢にさせて真っ赤になってました。

勿論洋服を買ったのはいいけど、帰る時に面倒ではないか、との話が出たから宅急便でお願いした。だって量が多いから……。しかも、もし持ち帰るとしたら運び手は俺と士郎でしょ？何かあったら困るじゃん…！まあ持ちたくないという言い訳ですけどね。

で、セイバーの服とアルクの服も買わされた…婦人洋服って高いの

ね…。

「ナ…ナオト…どうでしょうか…？」

とか、

「どおナオト、似合ってる？ねーねー？」

とかさんざん聞かされて精神的に非常に疲れてしまった事をここに
独白します。

「…何か嫌な事言っただでしょ、私たちに。」

ム…って擬態語が当てはまるような感じでアルクが言ってきた。

何が起きたのか、俺の思考が漏れてしまっていたらしい…／＼（＾○
＾）＼ナンテコッタイ

「そんなことないっすよwはいw」

アルクもセイバーもかわええのう…

「よろしい。」

……これなんてサトラレ？

・
・
・
・
・

横断歩道を渡っている途中、犬がいた。んう？でも形が…。

「あれ…犬…？」

「ああ、犬ですか。……？何か妙な感じが…これは魔力ですか！？」

「ええ、そうみたいね。」

みんな分かるよね、あの獣みたいな感じの。犬と呼ぶにはちよつと大きくて、狼というには少しばかり小さく、顔の造りが違う。また、普通の動物であれば目は瞳孔等がきつちり見えるが、血の様な赤色で目が濁っていて判断が出来ない。そう、女性陣が全員気付いたように、何よりも犬が魔力を纏っている事。これが何よりも動物とは異なる点だろう。まさに魔獣。

幸い今日は人が多い。横断歩道には沢山の人がいる。ここでは襲つてこないだろう。

「でも俺たちを狙つてるとは限らないだろう。こつちを見ているわけでもないし。」
と士郎。

「いや、私たちを　いえ真祖の吸血鬼である私、アルクエイド・ブリュンスタッドを狙っているの。いや、違うわ。何故か分からないけどナオト、貴方も狙われてる。」

「お…俺も！？そんなあほな…。あ、こつちも見てますね、はい。なんか皆ごめんなさい。」

「はあ。アルクエイドだけだったなら私達には関係ないから帰ろうかと思つたけれど、ナオトがいるなら帰るに帰られないじゃない…。協力関係を結んでいるわけだし…。」

頭痛が痛いわ、という凜。遠坂側　もしくは魔術師側とも言い換えられるが　からすれば、死徒や吸血鬼といったものは、同盟関係

とは逆の立場の敵対関係にあたる。死徒二十七祖なんてやつらもいるが、チートになった俺は兎も角、普通の魔術師ならば到底太刀打ちできないやつらで、出会った瞬間塵も残さず消し去られてしまう程の力を持っているのだ。まあこれは余談だったね。

…とはいえ、獣は、理性を持つ人間とは違って本能で行動する。だから良く考えてみるといつ攻撃されてもおかしくない。その事に士郎を除いた全員が気付いたらしい。

「皆、行くわよ。」

「わかつている。」

「ええ。」

「当然です!」

「もう、大変ね。」

「お…オツケー。」

「ん?なんで皆急いでるんだ?」

約一名未だに気が付いていないのは本当に気のせいという事にして下さい。

大人数で横断歩道を走り抜いた。何人かの人達が迷惑そうに眉を顰めてこちらを見てきたが、そんなのは関係ないだろう。自らの命とどちらが大切なかと。

そうして走って辿り着いた場所はいつもの如く人気のない公園。

「ここらへんでいいわね。アーチャー。援護をお願い。」

「援護でいいのか、凜。」

「ええ。私たちは今回巻き込まれたのよ。一応同盟を結んでいるわけだから、協力はするわ。」

まあ当然か。協力関係にあっても聖杯戦争とは関係のない戦いだ。だから本当なら凜達は帰ってもいいわけで。ありがたい事だ。で、前衛は俺、セイバー、アルク。後衛は凜、アーチャー、士郎。…もう完璧じゃない？

「私を追って、そして本命ではないにしても私が追っていたヤツはネロ・カオスと呼ばれる死徒二十七祖の第七位なの。さつき犬みたいな獣をみた通り、たぶん獣を使ってくるわ。気を引き締めていかないと本当に死んじゃうわよ。」

「死徒…だと？ほう、あの薄汚れた卑怯に生きる下種か。…ならば私も本気を出させて貰おう。構わんな、凜。」

「ええ、当然。」

死徒、と聞いた瞬間にアーチャーの顔が引き締まる。必ず滅する、という心構えが見て取れる。若干殺気も出している。凜も、死徒と聞いて、今日は持ってきた宝石が少ないのだが、構えている。余談だが、凜は原作と違い、いつもアゾット剣を持ち歩いているようだ。しかし凜の近接戦闘は剣を使ったものではなく、言峰から習った中国拳法だから勿論それは構えてはいないが。

士郎は死徒についての情報を全くと言っていいほど持ち合わせていない。その為、士郎はメガネをかけた凜から死徒や吸血鬼とは何ぞやという講義を受け、納得した様子。イリヤは基本的に戦闘向けで

はないので、少し離れたところにいる。当然の事だけど、イリヤ一人だと非常に危険だからバーサーカーが彼女を護っている。

犬らしきモノが入ってきた。犬が俺たちと完全に向かい合う形になったら、突如どこからか男がやってきた。

「真祖の姫よ。沢山の友人を連れているな。全員死ぬことになってもいいのか。」

「いいえ、死なないわ。だって皆強いんだから。」

「そうか！冬木、この感じ…その女1人と男2人は英霊だな？あ、これは愉快だ。我が糧とさせて貰おう…。行け。」

「お前の事、知ってるよ。666の獣を使うんだろ。知ってる。」

「なに…？」

さっきまでの時点で俺たちなんて全く価値がないとでも見做されていたように、視線はアルクに固定されたまま。俺達なんて興味なしだった。しかしその事に気付いて、俺の知ってる発言から俺たちも殺害対象に入ったようだ。犬が1匹どこかに消えていった。男が虎の様な獣を2匹だす。

「さあ死ね…！」

虎の様なモノが俺たちを殺そうとやってくるが…この面子だし。全く以て怖くない。これなら一騎打ちをした時のバーサーカーの方が怖かったよっと。

一匹目。

セイバーが避け、すれ違い際に斬る。それを見越していたアーチャーが矢を3本同時かと思われるような速さで放ち、眉間に命中。それでも動いてくるので俺が投影したフラガラッハで攻撃。治癒不可能にして放置。

2匹目。

アーチャーの方に走り寄ろうとしたが、普通に間に合わない。アルクが胴体から真つ二つにして阻止。それをまたアーチャーが矢で射る。獣を貫通。動かない。良く見ると、それは形状が違うもののフラガラッハ。

「ぬ？戻らないな…。だが貴様らを殺してそのあとに時間をかけてでも戻せばよし。」

「フツ。傲慢も甚だしいな。私たちは、負けはしない。」

5匹目。

俺とアーチャー、更に士郎が干将・莫耶を投影、左方向からと上方向から、右方向から斬り一瞬で殺害。それを凜が魔術で燃やす。獣たちは黒い液体になるか、そこで脳漿を撒き散らしながら死んでいる。

20匹目。

海を泳ぐのではなく、地面を泳ぐ鯨のような獣。アーチャーが突貫。アーチャーに食らいつこうとするがアーチャーが上に飛び、その際に姿を見せたところを偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を使った壊れた幻想で殺害。
ブローケン・ファンタズム

100匹目。

セイバーが宝具を解放。エクスカリバーで周りに群がる50匹ほど

第12話（後書き）

……最後にちよこつとだけでもニヤツとしてくれたなら非常に嬉しいところですね！！ちよつと狙いましたw

アルクエイドの戦闘シーンを妄想することが出来ずに困っています。空想具現化って原作でもあんまりつかってないじゃないですか？

うーん…爪だけの戦闘ってのも微妙ですよね（；・、・）

感想？アドバイス？命令？みたいなモノがあれば宜しく願いします。

あとタイトル候補みたいな…。

次は日曜日か月曜日の朝7時に投稿したいと思います！
ではまた！

第13話（前書き）

こんにちは！（´・`・´）ゞ 乙であります！
今日も頑張りましょう！ノルマは6000字であります。

第13話

.....ふおおおおおう！？

気がつく俺はベッドに寝ていた。それも…テンプレの如く、知らない天井…。ホントに無敵のシンジさんどうにかしてくださいよ…。

「何してるですか、ナオトさん…。」

「あれ？幼女（髪）？」

「いいえ、神です。というか、そろそろ幼女は卒業させてです…。」

「噛みました。」

「ウソって分かります。」

只のネタなわけだが…。神様は知らないのだろうか、あの有名な化語を！この釣り針はデカかったぜえ…。というか、嘘を嘘だと見抜けずに薄い胸を反らしている神さんかけーw

「神ますた。」

「…ホントに噛んでた！？……いや、上手くないですよ、ナオトさん…。」

気付けばまたあの黒と白の世界。これは最初の頃のように夢なのかどうか知らないが、前回夢で来た時と同じく黒と白の境界線に立っている。…察するに黒と白の境界線に立っている人が神様に呼ばれ

た人。現れては消え、現れては消え…を繰り返している、俺も一度立った事のある白の世界が死者の世界といたところだろうか。まあ知らんがね、特に俺に関係なさそうだし。でも黒の世界って一体何なんだろう。その内聞いてみよう。

薄い胸を自慢げに反らしていた神さんは、今頃になって全く反応されていなかった事に気付き、少し顔を赤らめていた。きちんと羞恥心はあるらしい。彼女は一度ゴホン、と咳をしてからナオトに話しかける。

「それよりも、時間がないですよ…。ナオトさんまた死んだの、いや正確に言っとまだ死んでないですが…理解してるですか？」

「…？」

正直100匹目でこいつらキリがねえって思ったところで、ここに急に場面転換したわけで…。そこんどこさっぱり分からないわけだ。というか眠い…。

「おっと、まだ眠っちゃダメです。貴方は型月の世界でまた死んだんですよ…？いや正確に言っても死んでないですが。大事なことから2回言いました。」

「ちょ、何で!？」

俺は特に死亡フラグの立つような言動・行動共にしていないわけだし？こちらの優勢だったようだし？死ぬ要素がこれっぽっちもわかん。

「ナオトさん、優勢であるということと油断したです。だから死ん

「だです。」

おうふ。気の緩みかよ…。敵キャラに良くある死亡パターンですね、わかります。

「目が覚めたら戦闘前に戻ります。だから次は油断せずに頑張るですよ？」

「了解！」

頭が痛くなるです、と呟いている彼女。俺もきついから！何この無駄な殺し合い！なんか忘れてる気がするけど、怖いから！！型月
「ただけ！？はい、ハイテンション終了。」

「本来神の掟として、修業中には沢山干渉してはいけないことになってるです。でもナオトさんは友達ですから、特別です。だから今度は、今度は本当に死なないでください。死んでしまったら私は…」

「死んだらまた一人ぼっちになってしまっただろ？わかってるさ。大丈夫、心配しないで。行ってくるよ。」

ああ、眠たいな…じゃあボツチの神様の為に張り切っていきますか…！！！！

「あ、死なないように直死の魔眼と石化の魔眼でも渡しておくです。」

そう無茶苦茶な言葉が聞こえたような気がした…。

「…………ト！…オト…！ナオト…！大丈夫ですか！？」

現実には引き戻された。神は眼前にはおらず、代わりにセイバー、士郎、アルク達が何事かと俺をみている。

「あ、ああ大丈夫。ちょっと目眩がしたただけだから。心配かけてゴメンね。」

今は皆警戒することはしているのだが、俺たちの前に敵であるネロ・カオスは未だに姿を見せていない。戦闘中から戦闘前に時間を引き戻してくれたらしい。あと、本当に魔眼をくれたらしく、石化の魔眼と直死の魔眼の存在が俺の中にあるのが分かる。実は俺がチートなんじゃなくて幼く見える神様がチートで主人公なんじゃないの、これ。

どうやら、戦闘前にネロ・カオスの正体を俺が説明した事になっているらしい。もう一回説明するの面倒臭いから有り難いけどね。これも彼女がしてくれたのか。もはや何でもござれだな。

「呆けているのもこれまでです！ナオト、来ます！」

「ああ、分かってる！」

ネロ・カオスが音もなくやってくる。

「やあ、真祖の処刑人よ。話してもいいが、どうせ死ぬのだ。するだけ無駄だろう。死ね。」

さつきと同じように様々な獣が現れる。上から、下から、右から、左から、後ろから、斜めから、全方位から。気がつけば俺たちの周りは獣に溢れていて、空も全く見えない。なんて数を用意してんだよと。しかし有り難いこともある。それは周りに沢山の頼れる仲間がいる事。そして相手が本能で襲ってくるから攻撃の軌道が分かり易い事。そして、神様が俺に2つの魔眼をプレゼントしてくれた事。

巨人、バーサーカーが吼える。

「行きなさい、バーサーカー。貴方の力を見せてあげて。」

わかった、とでも言うようにイリヤを一瞥して獣たちに攻撃を仕掛ける。獣たちの本能在がやつは危険だと嗅ぎとったのか、バーサーカーの元に獣が屯する。しかし、かれは英雄ヘラクレス。十二の試練を持つ。然らば傷一つつける事能わず。見る者から見れば彼の剣筋はあまりにずさん。しかしその威力、速さ共に最高級。伊達に今回の聖杯戦争で最強を謳ってはいない。十匹以上で襲いかかってもその一振りで、その剣の風圧のみでその獣全てが千切れ、血を噴き出させ、バラバラに砕け散らせる。イリヤを狙ってくる獣もいた。しかしながらそれを許すような彼ではない。雄たけびで怒りを表してもしているのか、イリヤの方向を向いたやつは順次瞬間的に消されていく。獣の意志が分かるのか、奴らがその意志を持った瞬間に殲滅されていく。

遠坂凜は、宝石は使っていない。奴らが彼女の希少な宝石を使うまでもないと彼女に判断されたのだらう。この獣に囲まれた状態であれば、いくら命中精度が低いガンドとは言え最高に相性がいい魔術だ。ガンド乱れ打ちで、彼女は獣たちを寄せ付けない。偶に予期せ

ぬ方向から獣が突進してくるが、ガンドを打てば突進の勢いは徐々に減衰し、やがて獣は動かなくなる。そしてそれを誰かが確実に仕留める。もしも万が一の話だが、彼女の魔力が枯渇してしまうとしよう。それは問題になり得るのか、いやならないだろう。そうなれば彼女は躊躇いなく宝石にたまった魔力を吸収し、魔力を容易に回復させるだろう。…凜完璧。ここでは流石にうっかりは出さないね

「遠坂さん、大丈夫？」

そう俺が問いかけるとこちらにもガンドが飛んでくる。…意外と余裕もあるらしい。そりゃそうか。

「さて、死臭を放つ醜い獣たちよ、私の攻撃に耐えられるか？」

「投影、開始。」

アーチャーが干将・莫耶を投影、そして流れるように何セットか投擲する。そして彼は投擲した武器を壊れた幻想で魔力を暴発させ、ブロック・ファンタズム獣たちを消し去る。その爆発は恐ろしいもので、それをすれば確実に包囲網にどでかい穴があき、公園の遊具などが見えるようになる。それは確かに彼の戦闘手段の一つではあるが、それだけではない。彼に獣が近づけば、彼は多種多様な剣 例えばグラムや、彼が良く使う干将・莫耶をその他にもデュランダル等を投影し、獣たちを切り捨てる。それで獣たちが近づかなければ、彼はそのクラスであるアーチャーになる。弓を投影し、更に宝具を投影させる。そしてその宝具を打ち出す。近距離・中距離・遠距離、どれをとっても獣たちには脅威で、ただうち滅ぼされていくのみ。

目にもとまらぬ速さで疾駆する女性たち。片方は騎士の鎧をし、不可視の剣を持つ女性。もう片方はどこにでもいそぐ普通の服

装をした女性。他と違う所はやはり全てを凌駕する強さ。バーサーカーでも勝てないだろう。吸血衝動を失った彼女は十割の力全てを使う事が出来る。ロアから力の一部を奪われてはいるが、現在の力だけでもはや最強。星からの絶対命令があるが、それはナオトが誤魔化している。単純計算で、制限された力+吸血衝動の押えで使われていた70%の力をふるえる。…更に、星はアルクの吸血衝動がなくなったことにナオトが気付かせていないから、制限されない。空想具現化しなくとも爪だけで獣たちが瞬殺される。バーサーカーの方は常に本気状態であるが、彼女の場合は本気なんて出さなくても全く以て大丈夫だ。ただ腕を右から左に動かすだけ。それだけで周りの獣たちは滅される。

不可視の剣を持つ女性も、仲間たち同様に容赦はしない。その素早い動きで獣たちを取り付かせず、すれ違いざまに真つ二つにしている。更にナオトとの契約で魔力は満ち溢れている為、何発だって宝具を使う事が出来る。しかしこんな公園でエクスカリバーなんて解放してしまえば、公園自体が大変な事になってしまうから使わない代わりに使うのは風王鉄槌^{ストライク・エラ}。どうしても避け切れない場合にこれを使用、多数の獣を屠る。その闘う姿は、アーサー王であった時の一期当千さを彷彿とさせる。

そして俺。石化の魔眼と直死の魔眼を重ね掛けする。獣は、弱いモノはそれだけで石化し、俺に死の点を突かれ散っていく。石化しないモノであっても、動きが遅くなり、同じく俺に死の点を突かれて死んでいく。その存在までも。

「…あれ、どうしたよ？ネロ・カオス。」

何時の間にやら獣たちは彼ら全員により殲滅され、残るは只彼一人

になってしまった。…いや、残り一人に見えるが、まだネロは体内に幾つか内包している。俺が殺した獣たちはネロ・カオスの内に戻ることはないが、他のやつは戻る可能性がある。もしネロが逃げれば面倒だろう。

「ばかな…こんな事が…あるはずがない…」

茫然自失状態で、現実を認めようとしない。だからここまで彼は逃げていなかった。某アーチャーのように、慢心していたのだろう。ただの餌（人間たち）の集まりだ、と。

「さて、残り少ないな…。覚悟はいいか、ネロ・カオス。いや、フオアブロ・ロワイン。」

「あああああああああ！」

怒りで我を忘れたネロが襲ってくる。ゼロ距離で俺を食い殺す気が…？だが断る！俺も走る…！そして奴の存在の死の点を突く！

ザッ、俺たちの位置は反対に変わる。俺は肩から少しばかり血が出る。ネロのほうは…、もはや消える寸前。

「そうか…その眼…。魔眼…か。しかしお前の事は理解できなかった。ああ、惜しい…。そうだ、真祖の姫よ…。蛇は冬木にいるぞ。ではな、」

そうしてネロ・カオスは消えた。

「他愛もない相手だったわね。」

「当然だ。これだけの者たちが集まっている。負ける道理が見つからんだろう?」

フツと笑うキザ男。

そりゃそうだろう。セイバーにアーチャー、バーサーカーがいて、更に規格外のアルクがいたのだ。ネロが逆に逃げなかった事が不思議で仕方がない。

というわけでネロ戦終了となりました!

…ん?俺チートで、本来なら一番目立つはずなのに、滅茶苦茶他の人たちが目立ってる…だと…!?

で、何でネロ・カオスが冬木にいたんだろう…。Fate…月姫…
同一世界…ハッ…!

もしかしてネロ・カオスが現れたのか、Fateの世界と月姫の世界が混じったのって俺のせいなんじゃないの!?

・
・
・

・ ・ ・ ・
さて、どういう事だろうか。隣で俺にちよつかいを出して
くるアルクと、それを阻止しようとして出来ていないセイバー。そ
れにアルクに大声で何かを言っている遠坂を無視して。俺の袖を掴
んでいるイリヤは無視せずになでなで。

やっぱり俺の影響だろう。あのネロ・カオスが月姫の舞台から移動
してきたのも、アルクエイドが冬木に来たのも。志貴が冬木にいる
のも。世界の修正力みたいなものなのだろう。

この世界に急に俺が現れた。圧倒的な魔力を持つ俺。原作を容易に
曲げ得る力を持つ俺。しかもどのような魔術を使ったのかさえわか
らない。

ネロ・カオスは魔術の研究の果てに死徒となった。死徒となっ
た彼の肉体は666の獣の命を持ち、各々の獣が意識を持つという
集合体となっている。集合体となってしまうと殆ど自我という
モノは残っていない。薄れて消えかけている自らの意識の中、
膨大な魔力と共に俺が来たことが分かった。どのような魔術なのだ
ろうか、と興味を持った。どのような魔術を使ったのか。あそこ（
冬木）にいつてみたい。獣たちにしてもそうだ。膨大な魔力（餌）
が発生した。魔力が欲しい。あそこ（冬木）に行ってみたい。その
本能と自意識が一致したのだ。そうしてネロ・カオスが冬木に行く
アルクエイドの目的であった蛇^{ロア}。月姫の舞台で連続殺人を行って
いたモノ。との盟友であるネロ・カオスが冬木に行った。ネロ・
カオスが冬木に行ったのなら、もしかすると冬木方面にも出没す
るかもしれないとアルクエイドは考えた。それで、冬木で深夜徘徊

をすることになる。もしネロ・カオスから情報を聞き出せれば蛇^{ロア}を追いつめやすくなるかもしれないと。それで二人が冬木にいる状態になった。で、俺と行動することになる。F a t eと月姫の修正力で、元の世界に戻そうという力が働きはしていた。しかし、やっぱり俺という異質な存在の所為でエラーが発生。元の世界に戻すことは叶わなくなった。ならばどう修正することになるのか。それは、最優位の修正が不可能になったため、第2位の修正が行われる。それは原作通りにアルクを志貴に会わせる展開に持っていくこと。これにより元から冬木市に遠野家があったことになってしまった。

まあ俺の推測だけだね。こんなもんでしょう。

はいはい、俺の脳内説明お疲れっす。自己満は済みましたか、私の脳味噌。…もしかして俺って天才なんじゃね!?

(はい、済みました!…でもそれはないっす。)

あー、まあこういう事です。こじつけにしか聞こえない!?!?そんなの気のせい!

俺の脳味噌から自分を否定されるなんてどんだけ俺嫌われてんだよ自分に。焦るわ。

というわけで、ネロ戦は無事に終了したのでした。

確かに、凜はアルクエイドがいるということに非常に反発してた。

しかし、今現在こうして俺たちと協力しているし、敵対することはないことを伝えた。するとなんやかんやで了承してくれた。了承してくれたというよりも、俺の言う事だから、と諦めたといった方が

語弊がないような気がするが。

第14話（前書き）

題名を無難に変えて、サブタイトルが全く意味をなしていなかった
ので消去しました。なので、「世界をチートで？ぶっこわせw!？」
という題名から「原作介入の行方!」というモノに。どこかにこう
いう題名のやつありそうですね。

第14話

いや、その宝石本物に見えるけど偽物だから。……ん？ 何で知ってるのかって？ そりゃあ勿論解析したからだよ、わかんなかったの？ ……ふはは、この世は全部偽物だとか言いながらこっちにガンドうってこないで！！ いや！！ 呪われちゃう！！

……ハッ、なんか今俺また悪い夢を見ていたような気がする……。今日は、昨日の出来事を話したいと思うよ。その前に、小さい子最高！！ あのすらりと伸びた細い脚。こちらを見上げてくるキラキラとした瞳。何者にも穢されていないという清純さ。幼いが故の無知さ。ふんわりとした唇！ そして！！ 発展途上の胸……！！！！！！ 実際の年齢が何歳であっても関係ねえ！！

いかんいかん、これ以上言ったら犯罪者になってしまう。あぶねえ。本当は口り趣味じゃないんですよ？そこんとこヨロシク。

ということでなんか分からないけど、今回はグダグダだったような気がしている、ナオトです。なんというテンプレ的展開かと。俺は一体なんなんだと。

皆にもあるだろ？ 夢を見たんだけど起きた瞬間に忘れていて、親とか友達とかに教えようとするけど結局教えられずにお終いになる。そんな夢。そういう夢を見たんだ。

そのあと俺は革命的な新仮説

実は俺がいる世界は2次元の世界

なのではないのかと　をしたわけだ。

根拠らしい根拠つてのは、この世界は俺たちの世界ではアニメとかだったことと、俺が分かった事や俺の知識とかが無意識に外に垂れ流されること。前者は最初から分かっていた。後者については、少し前に自覚した。

俺はそれを他の人に話したわけなんだな。でも結局は残念な人認定されたんけど。どうやらセイバーは士郎の悪影響を受けたものとして士郎を断罪していたけど、それは置いておこう。イリヤはそんな事に首を突っ込まずに優雅に縁側でお茶を飲んだよね。まじ可愛い。

騒動に巻き込まれなくなかったのか、イリヤだけは傍観して、俺が言ったことも聞いていなかったけど。もちろんバーサーカーも。暴れられるとこの家壊れるし。そもそもバーサーカーって言葉理解しているのかと。

でも結局はイリヤも怒ったんだけど。それは些細なこと。

その時から思い始めてたんだけどね？　イリヤは可愛過ぎて「萌え」を通り越して、某小説のように「蕩れ」だと。なぜなら！おおうつと。ここは皆を焦らしてやんぜ。

そうそう、俺の頭がおかしくなっただってところからだったね。

「……まさか、ナオトはエミヤシロウの影響を受けてこうなった？　ならばナオトを抱いて溺死しろ……！！」

「！？　アーチャー！？　……そういうことだったのね、士郎。だから私がアピールしても素っ気無くて、逆に私を心配してきたのね

「ふ、不潔よっ！」

アーチャーの言葉に何を勘違いしたのか凜さんや…。

「思った通りだったか……！ シロウ、そのような考えは捨てて神妙に縄につけ！！」

「まあまあ…じゃなく！俺が何したってんだ！そんな、俺は何m」

「言い訳不要！！ 疑わしきは罰せよ！ 嘘から出た真！！ 灯台もと暗し！ 私はシロウを断罪する…！」

もっきゅもっきゅしてるなって思ったら、案の定セイバーオルタさんでしたね。俺は何もしてないよ。無関係だよ。朝風呂にでも入って、バスタオルで髪の毛を拭いて水分を取った時にアホ毛がペタンと……。その影響ですか？ しかも構えているのはエクスカリバーとアヴァロン……ではなく、箸と茶碗。本格的に大丈夫なのかと。

「シロウ、魔術師の顛末として、私達と英霊に肅清されるなんて光栄なことじゃない。安心して逝きなさい……！！ 私はその体を使って……。」

フフフッと黒いオーラを出して嗤っている。どこかの少女が乗り移りでもしたのか？

ここまで俺にも実害なし。

ここから俺にも実害あり。

「そろそろ皆うるさいわよ。バーサーカー。」

ここで我慢出来なくなったらイリヤさんの参戦です。

一族郎党皆殺しみたいな言葉があるね。それみたいに、シロウを肅清していた彼女達はアーチャーにも目をつけた。

「ばっ、バーサーカー。馬鹿な事はやめろ！ 主の言を吟味し、適正かどうか判断して行動する事こそ素晴らしい主従関係というものだ……！」

なんか説得しようとしてましたがね。それがバーサーカーに聞こえたかどうかは分からなかった。しかし彼は結果的に止まった。首に触れるかどうかという一歩手前で。アーチャーは腰が抜けたようで、その場にペタンと座りこんだ。

「ふう……。なっ、まだセイバーがいたのか」

セイバーにアーチャーが粛清された……。でも俺は関係ないはずだ！ 逆に俺は話題作りをしたわけだから褒められこそすれ、粛清なんて絶対にされない！ 土郎、僕の、勝ちだ。君が昨日転んだ拍子にズボンをずらしたのが悪いんだよ？ それで僕の汚いモノが公衆の面前に曝け出されたんだし。皆に若干ひかれたし。アルクは逆に喜んでいたけど。わかんねえよ、アルク……。

「セイバー、お兄ちゃんもいいけど、ナオトお兄ちゃんには何もしなくていいの？ 粛清すればその体を……！」

「なんと……！ 失念していた。有難う、イリヤ。」

「凜、士郎を粛清するのもいいけど、事の発端となったのはナオトお兄ちゃんよ？ 真に粛清すべきなのはナオトお兄ちゃんの筈よ。」

「あー。ナオト、怨まないでね……。」

「粛清ってわかんないけど私も参加する……！」

アレ？ 雲行きが怪しいぞ……？ ニゲタハウガイイノカナ？

・ ばっ、気合防ぎばしへろんだす！

・ ・ ・ ・ ・

はっ。ここは…居間か…。

「おいしいわね、このトントロ！」

「ナオトのお金なくなるだけの価値は確かにあります！」

なん…だと…。こいつら高級寿司を食べてやがる…！ しかも俺のお金だと…！？

だ…だがもう一つ残っている。これを食べずにおくべきか…！

「だれよ、イクラ残したの。」

凜に最後の一貫を奪われる……。俺のお金……。そうか、そういうことだったのか…。あの人の心境がわかったぜ…恐らく、こういう流れでお金をなくして…。そうだ、ピーして奪えばいいんだ！ 五万円の画像うつp 「これを見つけたら、やるよ」 暗号うつp ピー。うひゃひゃ。

こういうわけか…。君の心境は非常によくわかるよ…。うひゃひゃ

…w

さて、そろそろ本題に入ろうかと思う。日記長すぎワロタだって？ そんなん知らんがな。それだけ俺の愛が詰まっているんだよ…！

寿司を食べ終わった俺以外に、イリヤが目配せをした。

その目配せをしたってことには辛うじて気付いたわけだが、俺はその時ボコボコにされている最中だったからまともな姿勢でもないわ

け。だから、一体何が何だか分からなかったね。

「え、マジでこれなんの仕打ちですか。俺は何か重犯罪でもしたんですか。」

こういう風に外に放り出されてさ。暫くどこかで遊んで来いと。小生か。小金下さいよ、お母さん。この前イリヤ等の洋服を買ってからお金少ないんですよ、と。

そうだ！　こういう時こそ創造が必要だよね！

バラバラのモノが繋がって一つの答えが出来上がった。つまり閃いたわけ。お金を作ればいいじゃない！

閃いた所非常に悲しいんだが、お金って製造番号があるじゃん。だからお金を俺が創造したとしても結局この世界のどこかでおいおい可笑しいじゃねえか、何で同じ製造番号の紙幣があるんだよってなる。だから単純に複製してはいけないわけだ。

だから俺は、金運・幸運のお守りLv・MAXを創造した。それで、冬木のカジノに繰り出した。

昼ということもあってか、人はそこまで多いわけではない。

ここはだな…。ブラックジャック一択だ！　俺の得意なゲームといえばこれしかない。

人数は4人。一人は金髪の男。カジュアルな服装。なんというか、苦勞を知らなさそうな奴だ。左隣のやつは顔がおかしい。どんだけ顔がとんがっているんだよ。俺の右隣のやつは老人。これは普通の恰好である。そこまでお金持ちに見えない。

ベットをしてからカードがディーラーから配られた。数は2枚。デ

イーラーも2枚。

一枚表にする。10。あ、なんて思うが気のせいだろう。次に5。
この時点でストップした人もいたが、俺は攻めた。3枚目。6とき
た。21ぴつたりになった。ディーラーは20。俺の勝ち。
その後も俺が勝ち続けた。

「こんな…正気の沙汰とは思えない……！ 勝つのは俺のハズ……
…ッ！ 何故……！」

そう叫んだ彼は従業員達に強引に連れて行かれた。何が起きるのか
って？ ハハハハハ、そんなの知った事ではありませんよ。

「馬鹿な！？ この我が、王が負ける……だと……？」

皆自信があつたのか、非常に打ちひしがれている。それはディーラ
ーであつても例外ではない。いかにも歴戦の勇者のような雰囲気を出
していたが、勝負が終わった後はその背中に哀しさが張り付いて
いた。大損失を出した店側はこれで普通に返してくれるはずがない。

お客様。私どもの一員である彼が貴方様と勝負をしたいと言
っているのですが、いかがでしょうか？

なんて言われたら受けなきや男が廢る。

次の勝負はポーカー。ここでも俺のお守りは効果を遺憾なく發揮し
てくれた。全く負けることなく終了。そろそろ帰らないと拙いので
はないかと思い、帰る事にする。

元手は10万円。結局集まったお金は400万。これもう無敵です
ね。俺の創造能力も馬鹿にできないね。恐ろしいわ。

それよりも店側が非常に可哀そうである。計390万円ものお金を
1日で失ったのだ。損失間違いないし。

次に来る時は多分他の店にもブラックリストとして載せられている
だろうから今日だけだと思い返し、まだ帰らない事にする。別の店
に突撃してみよう。

次の店はいかにも裏世界の店ですよ、といった所にある。黒い点々がところどころに飛び散っているのが見て取れる。明らかに裏の世界です。……とか思っていたら、どうやらお金の匂いを嗅ぎつけたのか、店員に催促され、店内に入る。

裏の世界ですよ、ね、といった印象とは裏腹に、店内は非常に明るい。しかし一般人はゼロ。

明らかにそっち系の人がゲームに参加している。さっきと同じようにブラックジャックで勝負。裏だけあってレートが非常に高い。ベットするお金も高額になっていく。

俺はこれの加護があるから大丈夫だと思っていた。でも負けてしまった。何故か。

それ以降も負け続ける。流石にこれはおかしいのではなからうか、と思って指摘してみた。

しかし帰ってくるのは厭らしい笑みと、お決まりの否定の文句。

……なら解析してやんぜ！ 透視した俺はすぐに気がついた。隠しカメラ、服に入ったトランプ、その他いろいろ。

それを指摘してあげたら支配人の登場。俺との勝負に。

当然真剣勝負なら俺に分があつた。ということで結局巻き返し。

獲得したのは1500万円。夜道に気をつけろ、と言われたが、俺が負けるはずがない。ワロス。

流石に時間がまずくないかな？ と思って衛宮邸に戻る。すると非常に豪華絢爛な料理が並んでいるじゃないか……！

俺があたりを見渡すと、恥ずかしそうにエプロンをしたイリヤがもじもじしていた。

これはイリヤが作ってくれたのだらう。イリヤだけで作れそうにないから、恐らく凜と士郎に手伝ってもらいながら。こういう時はセ

イバーとアルクが空気以下？ …… 気のせいだろ。

「……もしかして、イリヤが作ってくれた？」

「うん。人間にしてくれたナオトお兄ちゃんへのお礼。どう？」

「いや、凄すぎる。これだけ作るのも大変だったんじゃないか？」

「い……いや、大丈夫！意外と簡単だったんだから！」

もじもじしながら、そして顔を赤くさせながらそう発言するイリヤさんが可愛らしすぎる。もう死んでもいいぜ！！

「そ……、そんな、死んだら駄目に決まってるじゃない！ 私の為にも生きて！」

声が漏れていた……だ……と？でも可愛過ぎる。

「お、おいしくなかったらごめんなさい！ でも一生懸命作ったの……！」

何度も言わせてもらうが、半端なくその時のイリヤさんが可愛くてさ……。ここで発表しようと思ったわけさ。

オチ？ そんななんないよ？

第14話（後書き）

どうでしょうか？

第15話（前書き）

なんだろうか…私にモノカキの才能のかけらさえも感じ取れない…。
ギャグパート？笑わせんな。笑いなんてものは全く以て取れてないんだよ。

……。ここまで妄想しました。

第15話

士郎side in

「まあ、集団昏睡事件の犯人は柳洞寺にいるキャスターなわけだけれども。」

夕方になって俺が買い物に行こうとしている時にナオトがそう言った。

俺は正義の味方になりたい。少なくとも手の届く範囲の。

それは確かに歪んでいるのかもしれない。けれど、あの結界の中でアーチャーとの戦闘（殺し合い）でアーチャーも認めてくれた。

そこまで言うのなら成って見せろ、貴様の言う正義の味方とやらに。但し、凜達を悲しませるような正義の味方など要らん。道を踏み外した時は私が殺してやろう。

……アーチャーは確かに気が食わない。だけどそれは同族嫌悪つてもんだろ。でもそれはどうでもいいことだ。俺にも理解者がいて、真の意味で俺の歯止めになってくれる奴がいるってわかったのだから！

だから俺は止めに行く。学校の友達が犠牲になる日も近いかもしれない。もしかしたらもう犠牲になっているかもしれない。それだけは、絶対に許せるもんじゃねえ……！

「ナオトは一緒に行かないのか？」

「ああ、行かない。凜にも言ったけど、ここは俺たちの拠点。それを取られたらどこに行く？ どこもいけないさ。それなら絶対に誰かが残らなきゃいけない。だから俺は残る。」

そう、いつもバカみたいに俺をからかい、真剣に物事を考えていなさそうなナオトが、いつもとは違う真剣な眼差しで俺を見て言った。

「私もお兄ちゃんと一緒に行くわ。だって敵の本拠地なんだから、どんな罠があっても不思議じゃないんだから。」

「ああ、ありがとう、イリヤ。」

「……………あと、こんなことも知れない女と一緒になんて危ないし！ 良い感じでしたと思ったのに……………」

「誰が、誰とも知れない女ですってえ？」

「貴女の事よ、ミス・トオノ。あ、名前間違っちゃったわ。ミス・トウサカ。何か間違いがあって？」

イリヤが意地悪そうな笑みを浮かべて、凜にちよつかいをだす。それが緊張を緩和させようとしてかどうかはわからないが、凜もそれに乗っかる。

「イリヤが士郎の姉？ ハッ、本当のことだから……………。じゃあ何で貴女は……………」

……………これ本気で言い争いしてないか？ ………………なんでさ。頭が痛い。これで確かに緊張は解れるだろうが、その分エネルギー

を消費しているぞ。

ところどころで「違うもん!」とか「士郎の事は別に…ゴニョゴニョ」とか聞こえてくる。どちらも顔を真っ赤にさせて。それは微笑ましい光景だ。ナオトも笑っているじゃないか。

まださっきの口喧嘩を思い出してか、ナオトがくっくつと笑う。

……凜、闘いの前にそんなガンドを無駄撃ちしちゃダメじゃないか。……魔力の無駄使いだぞ。イリヤもそんなバーサーカーでキルしようとしても駄目だぞ。ほら、ナオトの腕が落ちたじゃないか。

「士郎、凜、イリヤ。こっちにきて!それにアーチャーとバーサーカーも。」

ナオトが、これを一応渡しておくよ、と言って一人ずつ袋を渡す。

ナオトは自分の腕を拾う。

「僕のチートスキルを使用して指輪を作ってみました。」

ナオトは続ける。どうやら……。戦闘直前に袋に入っている指輪を嵌めて欲しいとのことだ。

「分かったわ。」

凜は一瞬逡巡したあと了解。同盟関係にあると言ってもナオトだってマスターだし……。無意識に警戒してしまう部分がやはりあるんだろう。

じゃあ行こうか。

……ナオトの腕はくっついたようです。

士郎 side out

どうも、毎度お馴染みのナオトです。予報をしたいと思います。
今日の天気は晴れです。しかし、一部では風速が5000mにまで
及ぶでしょう。

カツラの人は今後警戒が必要です。

何故急にこんな事を言い始めたのか。士郎は、この事を知ってしまった。最近のガス漏れ事件が魔術師とサーヴァントの所為であるという事を。ちなみに俺がバラしました。いや、テレビで丁度その事件の特集が組まれていて、つい軽く言っちゃったんだよね。

凜もその事は知らなかった。

柳洞寺には霊脈があり、非常に強い魔力があるから何かがある、もしくはいるかもしれないと考えはしていたようだけど。

それで士郎に問い詰められた俺は、彼らが柳洞寺の先生とそのサーヴァントであると教えた。

そしたら、正義の味方を目指す士郎君は当然止める為に乗り込むぞ！と言いました。俺はいやでした。ということで、即席で指輪を作ってもたせました。それから士郎と凜、それにイリヤは柳洞寺に乗り込む為にこの家から出ました。今ここ。New！

俺は行きたくないから衛宮邸に残りました。凜に同盟はどうなったの？と聞かれたが、本拠地であるここが陥落しでもしたらどうするの？と聞くとじゃあお願いと言っていました。

ランサーやら、ギルガメッシュやら、そして言峰やらの動きがない。だから今不気味だなあと思っているところあります。

戦力が分断されている時に絶対来るよね、こっちに。間違いないよ。

聖杯戦争が末期だったからこそイリヤが連れていかれたんじゃないのか？

それはどうでもいいことでしょう。ギルガメッシュは士郎達能力こそ天敵だけど、それ以外は無双。だからギルガメッシュが参戦すれば聖杯戦争も終わったようなものだし。

もしもここで姿を現すようなら、本格的に参戦してくるということだと分かるし。

カランカランと事の始まりを示すかのように、侵入者あり、と俺たちに伝えてくる。

ああ、やっぱりきた。聖杯戦争の本格的な始まりを教えてくれているような気がする音だ。

何とも言えないこの乾いたような、不吉な音。

一気に緊張感が増す衛宮邸。俺の隣にはきちんとセイバーとアルクがいる。更に、この時の為に暖めていた策（笑）がある。

.....。あれ？ これ誰が来ても勝てるんじゃない？

士郎 side in

ナオト達を残して柳洞寺へ、足早に進む。もう既に日が暮れかけ、夜の闇がこの冬木を覆おうとしている。

完全に余談だが、平安時代などの古い時代では、夜になったら真っ暗。文字通り世界を闇が支配した。

当然その時代に懐中電灯なんてオーバーテクノロジーなモノはなか

った。しかし、完全になかったのか？ という問いには、一応あった。そう返答する事が出来るだろう。

その時代にも蝋燭の様なものがあつた。蝋燭とは全然違うが。入れ物に油を注ぎ、それに火をつける。それで明るさを得ていたのだ。しかし当時はその油も高価であり、ほいほい使う事が出来るようなものではなかつた。

貴族でさえ頻繁に使う事が出来なかつたのだ。ましてや一般ピープルなら尚更だと分かつて貰えるだろう。

夜の闇が支配したら、その闇が続く間は妖の時間だと考えられていた。何故か？ 闇には人が恐怖から作り出した化物 妖怪 が潜んでいると言われていたからだ。それが妖怪の発祥であるらしい。

普通足早に、一部で走つて。また犠牲者が出ないようにと急いできたのが功を奏したのか、いつもかかる時間よりも早く柳洞寺に着いた。

ナオトに言われた通り、全員が指輪を装着。

効果は戦闘の時に確認しちゃってね、ということらしい。

それにしても明かりがないな、と思つていたら凜の方から明かりが生まれた。どうやら凜の場合は自分が考えた通りの事が起きるらしい。これも魔術のようだ。ただ、凜曰くこれはこの世界の魔術とはちよつと違うらしい。

なんだ、これ。

隣では凜がウツ、と吐き気を堪えている様子。

アーチャー。感情を殺した目であたりを見渡している。ただ、何も感じなかったというわけではないようだ。アーチャーの奴も俺みたいに拳を固く握りしめている。

夜の闇が刻一刻と俺たちの世界を侵食していくなか、柳洞寺の敵対者が俺たちを待ち構えているだろうという予想に反して、誰も俺たちを迎えてはくれなかった。凜が明かりをつけてから、俺たちが目にしたものは……………。

士郎 side out

第15話（後書き）

では、今回はこちらへんで。なんか少ないっすよね……。次はもっと多く書きたいところです。

……ギャグパート？ 的なモノはどうやってら書けるのだろうか……。

完全にキャラを把握しないと駄目っすね。あとは何が必要だろうか？
やはりアイデアとキャラ把握でどうにかなるものなのだろうか？

第16話（前書き）

少し落ち着きました。

少しですが、投稿させて貰いますよっと。

読んでやってください。

第16話

第16話

そこにあつたのは。死体の山。いや、死体と呼んでいいのかどうかさえわからない。

「死体」という言葉を分解すると、死んだ体である。これから意味を推測したならば 死体の定義によって異なるが、一般論的に言えば これは死体とも呼べない。

俺たちの眼前に広がっている光景。それは、辺り一面の血、血、血。それに何とか腕だとか、足だとか分かるもの。そう、これは肉だ。そしてその肉の主だったものは恐らくこの寺の修行僧達。バラバラにされてしまったのだろう。そう、恐らくは裏切りの魔女によって……。

「なんてことをしてんだ！ふざけるな！」

過去の士郎が言う事も分からない事はない。だがこれは戦争なのだ。戦時中に軍人ではない民間人が殺されたからといってそこから大元は何かアクションを起こすか？ いや、起こさない。仕方のないことなのだ。

「衛宮士郎。お前の言いたいことは確かに分かるが、これは戦争だ。これはどうしようもなかった。柳洞寺にサーヴァントが入っていた時点で予想がついた筈だ。では今お前がするべきことは何だ？ここで一体お前は何をする？」

「俺は……。俺は、これ以上被害が広がらないように奴を、キャスターを止める！それが今の俺に出来る事だ！」

彼は不敵な笑みを浮かべる。それが今の衛宮士郎の取るべき正しい行動だとも言うように。

「覚悟はいいかしら？じゃあ行くわよ！」

当然だ。見て見ぬふりなんて出来なし、しようとも思わない。

しかし、柳洞寺の門を通ってきて気付く。何か変ではないか？この死体が散乱した状態はもう既に異常だが、それではない。敵対者が入ってきたら、攻撃が飛んでくるとか、罠が発動するとか、何かしら状況が変わるのではないか？俺たちが侵入してから何もアクシヨンがないというのもおかしいのではないのか？

凜とアーチャーは瞬時にそう考え付いた。

少し経ってからそれに全員が気付いたようで、構えは誰も解いていない。

柳洞寺には池がある。その近辺まで彼らが歩いて行くと、誰かが池のほとりに立っている。柳洞寺は今、明かりがない。だから、近

くまで行かないとそれが誰なのか見極められない。そしてそれが被害者で生き残りなのか、はたまたそれが加害者であるのかわからない。緊張感が漂い、手に汗をかいている。

池のほとりまで来た。あと僅かで分かるかもしれない。

そこで、前にいる「誰か」が、声を出さずに口をいびつに歪め歯を？き出しにし、ニヤリ、と嗤ったような気がした。

その行動は本能によるものなのだろうか。背筋が凍るような感じ。それに、心臓がドキリ、としたと思ったら 最初から心臓は早鐘を打っていたが 体が勝手に回避行動を取っていた。月明かりがそれを照らす。それは……。士郎は、軽い悲鳴を上げた後、二の句が継げられなくなった。

「士郎！ちよつとあんた何してん……！」

横にいた少女も同じだろう。そこにいたのは、彼女の唯一の肉親の、桜だったのだから……。

彼女が肉親だと知っていたのは、ナオト、遠坂家元当主達、桜、凜。その位のものだ。

アーチャーは記憶なぞ摩耗していてそれに関する情報を持ち合わせではない。

士郎の隣を影が通り過ぎていく。

周りは真っ暗だが、それ以上にその影は黒い。

そしてその影の雰囲気ギモチワルイ。本能が警鐘をならしているのか、あれにはどうしても近づこうという気にならない。むしろ離れたい。

いい加減眼が慣れてくる。

既に全員が間桐桜だとは気付いていたが、心の中のどこかで否定し

ていた。

だがその否定も打ち崩される。
少女の言によって。

「桜……、あんた……！」

「クスクス、どうしたんですか姉さん。そんな真っ青な顔して。」

似ているだけの別人ならよかった。

「今日は月がきれいですね、先輩。こんなきれいな月の日には人を殺したくなっちゃいます。」

これが夢だったらよかった。

「クスクス……………」

でも、これは夢でもないしそっくりさんでもない本物の桜。

何が起こったのかは分からない。でも、こんなことは何としても止めなきゃならない……！

士郎・アーチャーはそう思う。

凜の唯一の肉親がこのような凶行に出てしまった。その衝撃は大きい。

ただ、彼女は腐っても魔術師。魔術師は肉親であっても、その情を切り捨てて闘う。

衝撃は確かに大きかった。だが、絶望するには足りない衝撃。絶望

にはまだ早い段階。

だから、彼女は心機一転、感情を制御し相手を見る。

イリヤも一緒。少なくとも時間を共に過ごしていたとしても、彼女も魔術師。情なんて切り捨てられる。

ただどうしてこうなってしまったのかと、彼らはその原因について想いを馳せる。

少し時間を遡ってみよう。

それはアルクエイド達が衛宮邸に住みついた直後。

純日本風な雰囲気を持つ少女は、彼女が慕う赤毛の少年を起こしに行く。これはいつもの日課。聖杯戦争なんかよりずっと以前から続けられてきた日課。

だけれど、

「先輩、あさ……」

「おはよう、桜。」

もう先輩は起きている。セイバーによって起こされて。

翌日は、ナオト。

その翌日も誰かによって。

その翌日も。

その翌日も。

皆が集まって楽しそうに話をする。その会話にも入れない。桜が口を挟まずとも、会話は続いて行く。

そうして彼女は思う。私はここにいらなくてもいい存在なのではないだろうか。

どうでも良い存在なのではないのか。そして、衛宮士郎にとっても、そう考え付き、彼女は絶望した。

そろそろ良い頃合いかのう。

どこからともなく声が聞こえた。

第16話（後書き）

最近のSSを読み漁り、思う事があります。

「言う（いう）」を「ゆう」にしたり、

「は」を「わ」にしたりする。

何かを狙ってやっているのかは知りませんが、

何かこう鼻につくものがありますよね。

気になるところです。

お読みいただきありがとうございました。

次も頑張って投稿させて貰います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5447m/>

原作介入の行方！

2011年8月13日04時23分発行